

亞刺比亞人は、如何に勇敢なりしにもせよ、亞細亞及び亞弗利加大陸に於ける彼等が牙軍の一分隊に過ぎず。此方は即ち全半島の國民を擧げて、而かも『ピレニー』山以東の歐洲騎士の後援を有す。誰か其勢力一朝にして崩壊すべきを想はむや。思ひきや、『タリック』の一戦に破るゝや、擧國風を望みて降伏し、『コルドブ』政廳の半月旗は忽ち絶對の威力を擅にせり。加之當時の貴族は概ね争て款を其國仇に通じ、回々教に改宗し、以て其榮達を計りたり。中世西班牙の騎士にして其勇名を史上に止めたるもの多く基督教的名稱を有せりと雖ども、概ね半月旗の下に戦ひたるものなりき。

夫のキッド(Cid)は世に所謂西班牙の國民的勇士なるものなり。獨一人が其ジグフリードとヒルデブランドを稱し、英吉利人がアーサーを敬し、印度がラーマーヤナを尊ぶが如く、西班牙人は今日尙ほ自國の歴

史中にキッドの名を有するを誇るなり。キッドは果して歴史上に實際存在したりしや、否やは暫く問はずとするも、其國民的理想を體現せる人物なるは疑ふべからざるなり。然れどもキッドは西班牙國の爲に戦ひたる者にあらざりき。彼の事蹟は畢竟一個人の勇悍義俠の物語に過ぎざると猶ほ我邦の岩見重太郎、宮本武藏の如きなり。是を以て名は即ち基督教擁護の爲に戦ひたりと稱すと雖ども、時としては却て回教徒の旗下に勇名を競ひたり。例せば『サラゴツサ』の回教酋長ベコフツドの爲に『グレサ』の戰場に臨みたるが如し。眞に國を愛し、教を護るもの、安ず其不俱戴天の深仇に與して、甘じて犬馬の勞を取るべけむや、而してキッドの剽掠を事とするや、時としては其の基督教に屬すると回々教に屬するをを問はず。一切の寺院市邑を蹂躪して、眼中一も宗教上の差別を認むる無し。其部下には幾多の基督教の武士と共に常に多くの『ムール』族傭兵を

有して怪まず。キツドの志、一に中世の武士的勇俠を示すにありて、何等國家、又は宗教上の意義を有せざりしことは寧ろ明白に過ぐる事なりとす。是の如き非國家的勇士キツドの如きものを理想とする國民は果して眞正なる愛國心に富めりと謂ふを得べきか。見來れば、西班牙人のキツドに於て歎稱する所は、其個人的勇俠の一事のみ。而して是個人的勇俠の一事たる、是國民が其歴史の到る處に發揚せむことを力め、且現に發揚したるものなり。今の人の所謂西班牙人の愛國心とは畢竟是勇俠を誤認したるのみ。

是の如く述べ來らば、或は疑を挾むもの問はむ。『ムール人の羈絆を脱せむが爲になされたる六百年間の争闘は、是れ西班牙人の愛國心を表明せるものにあらずや』と。然り。是永き歲月の間の争闘は、遂に西班牙の國家を統一したるのみならず。又其國民的性質を陶化するに於て少

からざる力ありたること、吾人は是を認む。然れども、是争闘を以て西班牙人の愛國心に出でたる者とするものあらば、是れ歴史を讀むの法を知らざる者のみ其動機實は主として異宗教の排撃に存せしなり。『教の爲め』とは、當時全歐洲の呼應したる所、西班牙人亦是潮流に隨て小十字軍を其國內に起したるのみ。是の宗教戦争の結果として、國家の統一を見るを得たるは、寧ろ西班牙人にとりて偶然に屬す。是を以て『アラゴン』、『カスチル』兩王國合併の後に到りても、回々教徒の迫害愈々甚しく、フヒリツプ二世治下の宗教裁判の如きは、西班牙歴史中の最も血痕淋漓たる部分たるなり。

然れども、十四世紀以後に於ける西班牙國民が、異宗教徒と多年の争闘結果として、多少國家的觀念の修養を遂げたるは、疑ふべからざる事實なるべし。然れども吾人は他邦に比して特に優れたるものあるを見ざ

るのみならず、是を魯、英、獨、佛等の諸國民が、近代人文の大勢に乗じて、最も鞏固なる國家的中心政治の方面に進歩せしに比すれば、尙ほ相去ること啻に百歩のみならず。吾人は遂に西班牙人を以て忠君愛國の人民と思惟すべき所以を知らざるなり。

今茲に西班牙史を反覆せむことは、讀者の忍ぶ能はざる所なるべし。單に今世紀の事蹟に就いて見にも、西班牙人が其君主及び國土に忠愛ならざるの例證、比々として相連なる。試にチャールズ四世治下の西班牙を見よ。國民の一派は奈破翁を歓迎し、『マドリッド』の朝廷は將に大西洋を超えて『メキシコ』の殖民地に遷移せむとせしにあらずや、(一八〇八) 超てフェルナンド七世の時代を見よ。國歩艱難の際、民心の統一を須要とするにも拘らず、急進黨エキザルダドスと、專制黨アソルチストとは、私争の爲に國事を忘れ、佛蘭西のルイ十八世が内亂に乗じて兵を『マドリッド』に送るや、議會は

却て是を歓迎し、國王の無能力を議決せり(一八二三)。更にマリア、クリスチナ皇后の攝政時代に入るや、國事は愈々朋黨争攘の器械となり、皇后クリスチナ黨と太子黨カリストと鏑を削りて相闘ひ、國內の叛亂となり(一八三五)、憲法の改正となり(一八三七)、遂に外邦の容吻を誘致せり。是の如き事蹟の何處にか、所謂忠君愛國の感情の特に現はれたるものありとするや。吾人を以て見れば、西班牙人は世界に於て最も忠君愛國の情緒に乏しき國民の一たるなり。

吾人は茲に西班牙衰弱の原因を説明するの違無し。想ふに國家經濟の紊亂も其一原因なるべく、倨傲尊大、與國の惡感を買ひたるも其一原因なるべく、專制暴虐を是れ事として、統御の術を知らざる事も其一原因なるべし。其他幾多の原因あるにせよ、國民が國家的觀念に乏しく、忠君の情緒を欠けることは、其最大なる原因たるべきなり。

然るに今日無學なる基督教徒は、是の如き零落の妖兆を具備せる西班牙と我日本とを比較して、國民が其君國を思ふの情相似たりとなし、暗に忠孝を以て國家の亡徴となす。是れ言を他邦の事に藉りて其の非國家的根性を暴露せるもの甚だ惡むべしとなす。抑々又明治聖代の下、是不臣の民ある吾人實に是を慚づ（三十一年七月稿）

### 自殺論

行ひ志を違ひて望を前途に喪ふ時、或は世事の非なるを慨きて航憐悲憤の情に勝えざる時、或は垢を含み嘲を忍びて世に立つ能はざる時、人往々自ら天命を裁して其生を絶つ。洵に悲むべき現象なり。廉耻を尙ぶ氣慨に富める吾國人の間には殊に是現象の繁きを見る。

自殺は必ずしも惡しきことに非ず、随分時と場合によりては却て生あ

るを悔ゆるも及ばざることあるべき也。されど苟も人生一切の義務を抛却し、斷絶して、尙ほ且其罪惡たるを免れ得むが爲には、其制約として如何なる事情を須要とすべきかを考へざるべからず。一時の氣勢に驅られ、前後の分別無く、一向に死を急ぐが如きは、深く戒慎すべし。又斯の如き自殺に對しては社會は區々たる憐憫の私情を捨て、公義公德の名によりて、斷々乎として最も嚴重なる制裁を加へざるべからず。

然らば如何なる場合に於て自殺は道德上の罪惡たるを免るべきか。

基督教徒、若くは基督教的倫理學者は自殺を以て神に對する義務を缺くものと説く。是の如き説は一笑にだも値せず。元來所謂神たるもの一の迷信ならば是の妄想の假設物に對して、實在者たる人間が何等の義務を有すべき筈無ければ也。よし假りに是の如き妄想を眞理なりと許すも、吾人自ら神の所生たる吾人の生命に關係するは不敬の所爲なりとの自殺

を難する同じ理由によりて、自生をも罪惡とせざるを得ざるべし。人は衣食住によりて自己の生命を繼續し、疾病あれば藥餌醫療を加ふ。之れ即ち神の支配せる生命に關涉するものに非ずや。もし生活を自然の動機なりと謂はゞ、均しく自殺をも然りと謂ふことに於て百千の例證立地に辨ずべし。

又自殺は自己に對するの義務を缺くと説くものあり。然れども自己に對する義務とは所詮自家撞着の概念ならずや。一切他を離れて自己なるもの倫理學上果して何等の意義を有し得べき乎。由來義務とは對他の概念なり。吾人が自己を修むるの義務ありと思惟するは、之れ自己が他に對する義務を遂行するの必要より起れるもの、苟も他に對して何等義務を有すること無くは、自己は全く道德の世界を離れたる一自然物に外ならざるべし。是時に當りては自己に對する義務と云ふが如きは全く無意

義の文字ならずや。

故に自殺が道德上の價值を有する唯一の制約は、對他の義務より生ずる關係に存すべきことは勿論、更にそれが罪惡と爲り得る條件も、爲り得ざる條件も、共に茲に存すべきこと明けし。

吾人の生活は所詮義務の連鎖なり。家にありては父子、兄弟、夫妻、主僕たり、社會國家に立ちては公民、臣下たり。其他師資、友朋、隣保、親戚に至るまで、分に應じて各々其盡すべき義務を有せざるなし。一身を以て萬境に對す、其遂行すべき業務は生を累ぬるも足れりとせざる也。もし吾人の生活にして一定の歲時方處に制限せられず、其能力はた圓滿ならましかば、吾人希くは平等博愛を以て實際の主義とせむ。而かも有盡有漏の身神には、素より是事あるを得ず、是に於てか義務の大小に隨て行爲に先後と輕重との差別あり。是に於てか道德は直觀のみを以て完

きを得ず、良心は教育を須要とし、道徳的生活の一部は孝察的生活となるに到る。夫の自殺と云ふものにして、若し一切義務の商量上、自己の生存の利益を認めざるの健全なる意識に本くものならむには、之れ實に罪惡として批難すべきものに非ざるのみならず、却て一個の道徳的行爲として是認せらるべき者たり。

げに人は如何なる場合に於ても其生命を維持すべき義務あるに非ず。若し世界中の何人も我存在の價値を認めず、却て我死滅によりて幸福を感ずるが如き場合に於て、吾は是あらゆる苦痛を忍びて尙ほ且つ是世に生存らへざるべからざるか。是時に當りて自殺は決して何人に對する義務を缺如するものに非ず、されば一の罪惡に非ずして、單に一個の不幸なる生靈の不幸なる最後に過ぎざるべし。基督を賣りたる後イスカリオテのユダは何が爲に長へに生存せざるべからざるか。

若し人あり一切義務の商量上、自己の死は自己の生よりも却て國家社會に有益なることを確認し、而して是の確認に本きて自殺を執行したりとせば、是れ實に志士仁人の行爲として賞讃せらるべきなり。世には怯懦を以て一切の自殺を嘲罵するものあり、如何にも夫の失戀に泣き、不遇に泣き、自己消化器の不良に原因する一般感覺の不快を以て、厚顔にも社會人生の缺陷に歸し、鬱悶憂憤の餘り一死に救濟の道を求め得たるが如き婦女子の輩は、實に薄志弱行の甚しきものにして、當然怯懦卑屈を以て批難せらるべき者たり。然どもあらゆる自殺は必ずしも然ざる也。且夫れ人は死すべき時に死せざれば、却て其生あるを悔ゆるとあり。想ふに世間當に死すべくして而して死し得ざるもの果して幾何あるべきぞ、自殺を卑怯なりとするものは翻て自殺をだに爲し得ざる卑怯漢の更に數多きを考へよ、吾人は淫を醫で生きるものが操を立て、死するものよりも、幾何

か勇敢なるやを知る能はず。夫の徒に社會國家の禍となりて、而かも尙ほ其蠢爾たる生命を維持する輩をして、自力によりて爲し得べき最高なる道徳的行爲の何物なるかを覺悟せしむるは少くとも彼等の志操を鞭撻し、遷善力行の道に就かしむるに於て必要ならずとせざる也。

然れども死は之れを再びすべからず、吾人は一方に於ては生命の絶對的に貴重なるものに非るを信じ、他方に於ては自殺の必ずしも倫理に反かざることを斷言するを憚らず。然れども吾人は同時に、世人が是一大事件の決行に對して如何に至大の責任を帶ぶるかを自覺し、其措置の極めて慎重、極めて公明なるべきを勸告す。人生行爲中尤も陋醜なる者の一は、失心の死なり、狂亂の死なり、卑怯の死なり。或は償ふべからざるの罪過を犯し、或は義務の重荷に堪えず、或は私情に刺激せられ、一死以て現世の繫累を脱せむとするが如きは、社會國家の倫理上許すべからざ

るの大罪惡たり。死を以て一切罪過に對するの辨解なりと思惟し、更に一層重大永久の罪過を加ふる所以なるを知らざるもの、其愚や則ち憫むべしと雖も、其罪や恕すべからず。社會は其私情に驅られて公義を顧みず、婦女子の滯涙に咽びて大丈夫の制裁を加へず、彼れ死せり、其罪恕すべしと云ふ。あゝ是の如くにして誤て風を成さば、耐持堅忍、以て最後の義務を遂行するの美德は却て怯懦として誹詆せられむ。我邦人由來死を輕ず、國家の強力は實に是死を輕ずるの士風に歸因するもの多しと雖も。以て平時の則となすに足らず。吾人は是死を恐れざる氣質の中、更に義務を重ずるの習性を馴致せむとを欲す。夫の慷慨氣を負ひ、謂れなくして匕首を弄するの輩に向ては、社會は須らく相當の制裁を加へざるべからざる也。

悔悟の時機來るや遅し

近來、民主的思想が政治及び教育社會に表はれ來りたるは、著しき現象なり、日本國民が其道德的意識の上に、一大猛省を要すべきの時機、漸く近からむとす。

民主的思想は、それが如何なる假面を被り來るを問はず、須臾も我國體と相容れざる也。彼の耳學の輩。外邦特殊の制度を談じて我邦に強ゆるが如き、抑々何等の陋態ぞ。我邦にありては、文明の進歩は民權の發達にあらずして、寧ろ臣民の義務を明確に理會するにあり。是れ皇祖立國の鴻圖を體認して、偉大なる國民的理想を實現する所以也。

今の政黨員中には、陛下の信任に立てる内閣を以て憲政黨の出店なりと公言したるものあり。今の政治を以て多數政治なりと公言したる政論

家あり。黨の決議、即ち内閣の意志たるべしと要請する憲政黨委員あり。『砂たる一個の俗士』を容して教育勅語の撤回演説を爲さしめたる教育會あり、而して社會は多く怪み問はざる也。

是等の暴論を公にして顧みざる輩は、無學無識、元より言ふに足らざるべし、而かも彼等を容して是を公言せしむる社會は、甚だ憂ふべき社會に非ずや。吾人は民主的思想の漸く社會の根底に汎濫し、是忠誠なる國民を蠱惑せむとするを見て、國民道德の危機漸く近きつゝ、あるを思ふ。

あゝ今の政黨なるものは、畢竟二十五年前の愛國公黨の假裝せるものいみ。『是政府は、人民の爲に設けたる政府として見るの外無かるべし』との公言は、今日に於ても尙ほ依然として其精神たる也。吾人は國民の悔悟の餘り遅からむことを恐る。(三十一年九月稿)



彼は彼たり我は我たり

若し世界に人道なる者あらば、そは同じき所に於て相合したる者なるべし。畢竟彼は彼たり、我は我たり。

哲學科學を以て宗教に代へむことは、歐洲に於ては明白なる失敗なるべし。我に於て必ずしも然らむや。

國家の權力によりて教會を撲滅せむとす、歐洲に於て或は失敗ならむ。我に於て必ずしも然らむや。

我れや、宗教の外に道義あり迷信の外に制裁あり、日清戦争の勝利は、佛敎の力でも無く、人道のお蔭でも無し。

今に於て漫に人道を説き、彼に宜しきものを以て直に我に強ゆ、其の愚や及ぶべからざるなり。國民的特性は、三千年の歴史によりて、明に檢

證せられたるに非ずや。我は只我が主義を箇中に求むべきのみ。

曲學阿世とは何の謂ぞ

夫の俗論者流は國體論者を目して曲學阿世と云ふ、何ぞ知らむ今の世に民主を曰ひ、自由を曰ふほ世俗に歡迎せらるゝこと無きを、臭い物身知らずとは彼等の事也、唯所信の爲に俗論に詬罵せらるゝを顧みず、時に一世の風潮に反しても尙ほ其侃諤を枉ぐる能はざるは是れ學者の良心也、曲學阿世とは何の謂ぞ。

少年國

我邦は夫れ天下の少年國乎人五六十歳に到れば、概ね半死の白頭翁也。是れ慥に大人物の欠乏せる一の理由也。人の名を好むや、其功を一生の中に收めむと欲す。老衰期の五六十なるものと、八九十なるものと、其

事業に於て徑庭ある、素より其所のみ。況むや成熟期の一年は、修養期の十年に匹敵するものあるに於てをや。試に我國の學者に見よ、年五六十に到れば進取の氣象頓に熄み、歴に既得の小名譽を墨守して失はざらむとを是れ務む。偶々後進者流の儀式的奉戴に遇て、時に時代後れの舊套を反覆するに過ぎず。世の既に己れと違へるを覺らず、其説の陳敗を以て傲然として高く標持す。寧ろ憫むべしとなす。

夫の五六十年にして自傳を編み、閱歷譚を述ぶるものは一生の事業已に終れりとなす乎。徒に過去を追憶するを已めて、何ぞ更に猛進一番するを務めざる。未來は少年の特有物に非る也。吾人は是點に於て、歐洲の大人物を景仰するの情に堪えず。

グラッドストーンは八十七歳にして尙ほ政界の大立物なりき。彼は其の死する數週間までは、ホームエルに就いて古典學者を驚倒するの意氣を

有せりき。八十二歳のピスマルクは老衰事に勝えざりしと雖も、五年以前には猶歐洲風雲の一角を握りたりき。現存の老人傑に就いて見るも、法王レオ十三世は以太利僧正中の尤も剛壯有爲なる一人也。彼れ年方に八十七。英の畫家トーマス、グーパーは今年九十五の高齡にして、ローヤル、アカデミーの繪畫會は年々彼によりて少からざる光彩を添ゆ。倫理學者及び宗教學者なるジエームス、マルチノは、一千八百〇五年に生れ、七十年以來其研究と著述とを懈らず。當時以太利の樂界に錚々たるエルヂーは今や方に八十四歳。英國女王は身神や、衰頹せりと雖ども、尙ほ七十八歳也。五六十年は是等の入より見れば壯者のみ。

大なる傳記は長き年月の下に編纂せられざるべからず。日本は遂に少年國に終らざるべからざる乎。

### 殖民地と歴史の教訓

米國は遂に全比律賓の占有を斷行すべしと傳へらる。『イムピリアリズム』は遂に西班牙に勝ちたる米國を征服せり。

然れども殖民地の利害に就いて、歴史の教訓を見よ。二十世紀には殖民史上の一改革を見むとは、爛眼なる歴史家の明言せる所也。

獨逸が歐洲以外に其範圍を擴めしは、歴々十四年以來の事也。彼の領地は亞弗利加に於ける九十二萬方哩の外、大平洋及び支那膠洲灣にもあり。されど内失費の莫大にして、外所期の効力を有せざるは、獨逸外交家の早くツブヤケる所也。佛蘭西は其保護國を合すれば無慮三百六十萬方哩の大領地を有す。然れども其の亞弗利加に在るものは素より言を踈たず、亞細亞、南洋、西印度にあるものも、實に非常の金額を本國より

補助するに非ざれば、維持し難き也。伊太利紅海沿岸の屬地も、徒に母國の納稅者を苦むるのみ。西班牙に到ては最も不幸なる殖民史を實驗せること、言ふまでも無し。日本も亦臺灣に困弊しつゝ、あるに非ずや。北米合衆國にして商業國たり、平和國たる以上は、是歴史の教訓に背きて比律賓を占有するの利益、果して確實なる乎。(三十一年九月稿)

### 主義と人物

多讀して博識を銜ふ、是れ豈士の世に處するの道ならむや。要は一以て之を貫くにあるのみ。

苟も主義を以て立つ。道理の存するところ之れ吾が當に往くべき所なり。狹隘と云ひ、寛大と云ふ、吾に於て爲す無きなり。況むや闖茸は寛大と云ふべからず、夫の散漫異同を辨せざるもの能く何事をか爲し得む

や。人は人物を見て主義を問ふ。而して主義を以て人物を問ふべきを知らず。迂なる哉。

釋迦基督にして初めて日本主義の如きものを唱道し得べしとなす者は、何ぞ釋迦基督に非ざる人にして猶且之を唱道したるを嘆美せざるや。

### 紳士録

坊間に『紳士録』と題する一書あり、其收むる所高利貸あり、博徒の親方あり、然れども是輩豈所謂紳士と稱すべきものならむや。

紳士は士也、君子也、品性德行に於て群氓の師表となるべき者也。夫の苟も所得税を納むるもの即ち目するに紳士を以てす、偶々國民の拜金根性を暴露し來る。是れ事小なりと雖も明に國民道德の危機を示す者に

非ずや。

### 成敗と正義

一物存在の眞意義は其依て以て其物たるを得る所の精神本領の存在にあり。正義を以て立つ所のもの一朝屈辱を忍ばば是れ已に滅亡なり。形骸は性格を作ること能はず。世間名存し實亡へるもの往々。進化の美名の下に滅亡の事實を掩ふ、斯の如くにして一種の幽靈的形式主義は殆ど無限の威力を以て社會に臨むに至る。是に於てかあらゆる不義は雲湧泉迸して其底止するところを知らざらむとす。

あゝ名目主義の弊なる哉。形式主義の禍なる哉。正義の爲に滅亡する國家は滅亡によりて榮ふ。所謂大義親を滅すとは實に是大主義の福音に非ずや。今や其性を失ひて而も其命を全ふするものあり。彼等はひいて

國家をして精神的死亡を遂げしめむとす。國其性を失はば之れ變化に非ずして滅亡に非ずや。世には死せる宗教あり。然れども國民は國家をして死せしむべからず。

正義の爲に斃るゝは正義と共に生くるなり。個人も國民も、已むを得ずむは、死して而して後生さるの大覺悟無かるべからず。

### 吾人の宗教觀

吾人の宗教觀は極めて簡單也。

宗教の主性は迷信なり。所謂宗教の改善は進歩に非ずして滅亡なり。

世に宗教哲學なるもの無し。もし有りと思惟するものあらば是れ一の迷ひのみ。唯宗教に關する科學としては宗教史と宗教心理學とあるべし。

前者は人類迷信の變遷を説述し。後者は迷信の人心に於ける心理學的根

據、換言すれば、人は如何に迷ひ得るか。次第を明にす。

宗教が人生の幸福問題と關係するの多少は國民精神に於ける宗教心の多少に依る。

宗教と稱する人心の病的現象に對する吾人の意見即是のみ。

### 怠 慢 罪

學者にして其信する所を公白するものは、其説の是非正邪に論無く、世の爲に盡さむとする其志や眞に嘉みすべきなり。是れを沈黙爲すなく徒らに背後の冷笑を事とするもがらに較ぶれば、遙に學者の本分を效したるに庶幾し。學者の説にして誤らば、そを難するは素より其所なりされど吾等は更に夫の社會の大事に臨みて沈黙爲す無きの學者に向て、世人が大に其怠慢曠職の罪を鳴らさむことを望むもの也。

爾は能ふ、故に爾は爲さるべからず、世は能力ある學者の爲す無きを咎めずして、而して單に爲して而して誤れるものゝみを誣る。吾等其の可なるを見ず。

### 西郷南洲の銅像

上野公園に立てられたる明治十年の叛臣西郷南洲の銅像、方に其工を終り、覆面將に撤下せられむとす。吾人一言の以て世に問ふべきあり。

昔者奈翁の戦に破れて『セント、ヘレナ』島に流竄せらるゝや、狂憤せる佛國人民は、國運の否塞を以て奈翁の罪なりとし、到る處其肉を喰はむと欲しき。越て二十五年、『ブルボン』王家其位に復し、ルイ、フヒリツプの治下に多年の平和を樂むに及び、健忘なる佛人は、再び奈翁の盛時を懷慕し初めぬ。是れに於て、南溟の故墳は發掘せられ、盛大なる儀禮

を以て巴里に改葬せられき。今や奈翁が佛國に與へたる苦痛と耻辱とは全く遺却せられ、唯是不世出の英雄の下に、是國が樂みたる權花一朝の虚榮を憫愴せり。

我西郷南洲は猶ほ佛の奈翁の如き乎。維新中興に於ける南洲が偉勳は永く史上に傳ふべし、其人物亦一世に曠しきものありしならむ。而かも彼は其末路に於て國賊なり。其の事情の如何に拘らず、帝命に背き、國憲を紊り、叛逆の大罪を干犯したるは事實なり。大義名分に於て已に缺くる所あらば、區々たる私徳の如きは言ふに足らざる也。

然るに今や則ち如何の狀ぞ。彼れの大罪は何時しか忘れられ、傳へらるゝ者は其の舊勳のみ、其私徳のみ、日本の歴史に比倫なき一種の尊稱は、特に彼の名に冠せられ、人は大西郷、大南洲を以て彼を呼ぶに非ずや。彼の叛逆の爲に作されたる辯護は、普く國民の認むる所となり、彼

の名によりて傳へられたる言行は依信と歎美とを以て聞かれざる無し。足利尊氏、平清盛に於て、天人共に容るべからずと思惟せられたる大罪は、彼にありては偶々其末路を美はしくしたるのみ、是れ寧ろ怪しむべからざる乎。

今や彼を崇拜せる國民は、傳記墓誌を以て尙ほ足れりとせず、其叛逆によりて其大人物たるを證したるを以て足れりとせず、彼の銅像は更に帝京第一の大公園に建築せられ、二百萬の府民をして是叛逆的大人物の面貌を、形體の上に景仰せしめむとす。南洲死後二十年にして是事ある、何ぞ奈翁の遺骸十年にして巴里に改葬せらるゝと相似たるの甚しきや。

若し私己の情實によりて人の行爲を品せむ乎、天下又罪惡なるもの無からむ。唯公道の凜として動かすべからざる者あり、名分是によりて立ち、大義是によりて明なるを得。西郷南洲の私徳や吾人の欽せる所也、

而かも彼を以て國民の崇拜に當り得るの大人物となす、其可なる所以を知らざる也、況むや帝京第一の勝地に其銅像を建築するをや。(三十一年

十月稿)

### 近 時 の 銅 像

偉人の像を建築するは、啻に美術として市街裝飾の爲のみならず、其高風英姿を想望せしむる事によりて、國民の志氣を感發せしめむが爲なり。事に當るものは其一面に於て、社會教育の着眼を欠くべからず。

更に想ふ、美術は國民氣風の反影なり、國民の氣風雄大なれば、其美術亦雄大に、國民の氣風卑屈なれば、其美術亦卑屈なり。夫の事に銅像建築に従ふ者は、即ち其事業が國民の氣風を體現して内外に表示する所以なるを忘るべからず。

近時銅像建築の事、頻に興る。就中著大なるもの三あり。宮城門前に建てらるべき楠正成の像、上野公園に建てられたる西郷南洲の像、及び筑前博多に立てらるべき日蓮の像、是なり。

楠公は日本忠臣の龜鑑なり、是を宮城門前に建つるは甚だ體を得たりと謂ふべし。唯其製作模型の嘗て美術學校内にあるものを見るに、其大いさの大ならざるを恨とすべし。且其態度は、悍馬を制する馬術師に似て、毫も沈勇忠烈の威風を止めず。未だ美術上の大製作を以て容すべからざるに似たり。畢竟是れ美術家が其手工の末技を表はずに專にして、楠公の精神を發揮するの更に大技工なるを思はざるの弊に坐す。

西郷南洲の銅像を、上野公園に建つるの妥當ならざるは、己に述べたるが如し。假りに世人の言ふ如く、南洲を以て大忠臣、大義士、大人物とせむか、斯る不世出の大偉人の紀念像としては、其像の如何に矮小なる

よ。九段坂上の大村益次郎の像は其技術に於ては夙に世人の嘖笑する所なりと雖も其大きに於ては慥に是南洲の像に三倍す。明治國民の理想的大人物を體現するものとしては何等の不倫や。國は東洋第一等の日本に非ずや、土地は二百萬の人口を有する日本帝國の首府に非ずや、場所は是大都府の第一等の公園に非ずや、而して建てられたる人物は日本歴史上に比類無き尊稱を有する、所謂大西郷に非ずや、而して其大きは宛然として益石的庭園中の物也。天下何物の不倫か能く是の如くなるを得むや。

若し夫れ日蓮の像の建てらるべき地が、池上に非ず、鎌倉に非ず、房州に非ず、身延山に非ずして、博多太宰府なりと云ふに至ては、其不當なること言ふまでも無き也。日蓮の安國論が元寇の豫言なりとは、歴史上に確證無き説なり。是曖昧なる一事を附會して、其像を太宰府に建て、



以て元寇紀念と稱するは、即ち當時日本の忠臣義士、別しては伊勢の神靈を侮辱する者に非ずや。若し是歴史上の一大事實の爲に紀念像を造るの必要あらば、何ぞ北條時宗、若しくは宗河野諸忠臣の像を以てせざる。日蓮宗の信者が、一安國論によりて是神聖なる故趾を齧斷するは、我國民の默視すべからざる所也。(三十一年十月稿)

### 罪惡の一千八百九十八年

世界は漸やく其罪惡の歴史を開展し初めたり、一千八百九十八年は罪惡を以て初まりて罪惡を以て終らむとす。

一千八百九十八年は十九世紀史上に於て恐らくは最も記憶すべき年なるべし。世界歴史の局面を回轉すべき運命を有する二個の事實は。實に一年に於て其端緒を開きたればなり。

二個の事實とは何ぞや、極東問題の解釋は其一也、北米合衆國の『帝國主義』は其二也。嗚呼十九世紀史上の何處にか、其影響の局面に於て是の如く廣大なる事實ありや。

一千八百十五年は華德堡の戦争を産したり、然れども奈翁の滅亡は、歐洲の私事なるのみ。一千八百二十三年はモンロー主義の宣言を産したり、然れども是れ北米合衆國の私事なるのみ。一千八百六十一年は以太利の獨立を産したり、一千八百六十九年は蘇西運河を産したり、然れども是れ何かあらむ。一千八百七十年の普佛戦争は、所謂プロイセン時代を作りたり、一千八百七十七年の魯土戦争は、所謂伯林條約を興したり、而かも是れ人類の一小部分が世界の一小部分に於ける權力の消長に過ぎざるのみ。一千八百八十一年の魯帝の暗殺は、ケルン禮拜堂の落成と共に、人類歴史上には無意義のみ、是の如き事を以て一千八百九十八年の二大

事實に比す、多く稱するに足らざる也。  
 一千八百九十八年は如何なる年ぞ、人類の歴史は是時に至りて初めて其世界的意義を有したり、東西兩半球は是時に至りて初めて其世界的勢力を合成したり、人類は是時に至りて初めて一團となり、世界は是時に至りて初めて一體となれり。

一千八百九十八年は如何なる年ぞ、人類の多數は是時に到り最も明に其道德的假面を脱落したり、國家の名によりて權力即正義の福音を宣傳せり、人類の多數は是時に到りて初めて自己の文明の虚偽なるを自白せり、所謂道義所謂宗教の畢竟獸慾の假面なることを暴露せり。  
 一千八百九十八年は實に是の如き政治的大影響と道義的大罪惡と其二大事實とを併せて十九世紀史上の最も記憶すべき年たる也。

所謂二大事實は、是道義的大罪惡の政治上に顯現したるものに外なら

ず。見よ、今日歐洲人の所謂極東問題の解釋とは、支那分割論の實行を外にしては殆ど無意義なるに非ずや。支那分割論とは、其口實名義の如何に拘らず、人の國を盗み、人の民を掠むるの謂に非ずや、學者や、宗教家や、道德家や、其哲學と聖書と經典とを執て、而して一言も其君主の人の國を盗み、人の民を掠むるを言はず、而して尙ほ神を言ひ、正義を言ひ、人道を言ふ、是れ十九世紀文明の真相也。

魯帝が解兵の提議は、白晝の假面のみ。猶ほ往年ゴルチャコフが正當防衛の爲になされたる中央亞細亞侵略方に其極限に達したりとの宣言によりて、歐洲列國を欺きたる如けむのみ。所謂フハシヨダ事件に關する英佛の葛藤は、純然たる野獸の爭利に非ずや。而かも兩國々民は歐洲文明の精英が是獸慾の爲に浪費せられむとすを見て、憂ふる所あらざる也。所謂アングロ、サクソン同盟とは何の謂ぞ、支那及び北米に於ける

私利の交換に非ずして何んぞや。而かも彼等は自ら目して人道の普及と言ふ也。若し夫れ米西戦争の如きは、支那分割論の實行と共に、十九世紀末の一大政治的事實たると同時に、又其一大道徳的罪惡也。

モンロー主義に閉鎖せられたる北米合衆國は、今茲一千八百九十八年の米西戦争を以て歐洲との交渉を開始せり、彼は戦争の結果として事實に於て玖馬を占有し、又將に比律賓を横領せんとす、是れ世界歴史の上に於て東西兩半球の結合したる一大事實なり。所謂アングロサクソン同盟なるもの實は主として北米合衆國が東洋に於ける是新勢力の扶植上より打算せられたるものに外ならず。是一大事實より當に來るべき諸般の結果は、來らむとする二十世紀史の重要なる部分を占むべきや又疑を容れざる也。

而して是の如き一大事實は果して何によりて起りたる乎、メーソンの轟

沈によりて一決せられたる北米合衆國の宣戰は、玖馬民人の獨立安寧の爲めになされたりと稱せられる、何ぞ其名の堂々たるや。而かも人の國を奪て人の民を掠む、目して人道と稱す、可ならむ乎、果して然らば夫の人の産を盗みて慈善を營むもの、果して仁者を以て稱すべき乎。二人の宣教師の故を以て膠州灣を強奪したる獨と、利益不平均の故を以て旅順と威海衛を横領したる魯と英と、一船舶の故を以て人の屬領を攫取したる北米合衆國と、其情狀に於て何の擇ぶ所が、宗教人道の假面を被り、白日公々然として虎狼の搏噬を逞うするは、實に十九世紀文明の真相にあらずや。

歴史家の十九世紀の文明を標榜するを聞くに、曰く博愛の精神、曰く個人の自由、曰く何、曰く何、凡そ這般の名辭の幾百を列ぬるも、是の蕩々たる國家的罪惡を奈何すべき。維納會議は實に佛蘭西革命によりて

攪破せられたる十九世紀文明の精神に戻れるなるべし。

一千八百十五年以降の八十年は、實に是れ會議の斷定を打消さむが爲めの歴史なるべし、而かも其末葉に到りて『帝國主義』が如何に翕然として天下の大勢を風靡し、人種の争鬪は如何に支那帝國の分割に終らむとするかを見よ。吾人を以て見れば、人類歴史の最も慘澹たる齟場は、方

に是より開かれむとしつゝある也。  
罪惡の一千八百九十八年は是の如くにして初まり、是の如くにして終らむとす、知らず來らむとする一千八百九十九年は如何なる年なるべき乎。

下 篇 文 藝

巢林子の女性

巢林子が戯曲に於ける『人』◎女子は如何なるものか◎愛と名譽◎嫉妬は愛の反面◎天の網島のおさん◎出世龍徳の吾妻◎陰權三のおさい◎名譽に殉せる宵庚申のお千代

Son Gott' und Welt'n weiß ich nichts zu sagen,  
Ich sehe nur, wie sich die Menschen plagen.

— Goethe.

一 巢林子が戯曲に於ける『人』

予輩は巢林子の戯曲を讀む毎に、其心容の如何に大に其同情の如何に博きかを想見せずんばあらず。須彌梅檀の山の月に色即是空を觀せし三界の教主を想ふの心は、即ち相の山の辻歌に花一時を唱ふの心なり。櫻

井驛の訣別に忠孝の義烈に感じたる涙は、即ち峴川の夕風にまゝならぬ戀路を忍ぶの涙なり。吉野初瀬の名木も、畦の小路の名も無き花も、共に等しく彼を喜ばせしなり。都大路に青海の簾を捲上げて月前に彈琴する深宮の上臈も、殖生の小屋に立かぬる煙に咽ふいふせき賤の柚男も共に、等しく彼を感じせしなり。彼は狹隘なる人爲の階級によりて人間に城壘を築き、若くは自が特殊の嗜好に準りて他を規するが如き種類の人には非ざりき。彼は大沙翁に似て、廓大なる胸襟を披き、自由なる精神を以て萬象に接するの人なりき。是れはた眞に戯曲家の旨を得たるものと謂つべし。

蓋し戯曲の目的とする所は或る特別なる社會、又は人物に非ずして、一般人間にあり。社會の階級と時代の差別とを離れたる一般人間の本性眞相を顯はすにあり。戯曲中の人物は素より一定の時代、階級、其他百

般の制限によりて各、其假相を帯び來るも、其發揚せんと務むる所のものは一般人間に平等なる眞相ならざるべからず。故に戯曲の要は殊の中に遍を寓し、差別の間に平等を示すにあり。外形の殊は内部の遍を顯はすの縁となるに過ぎず。故に凡て人性の本體を示すに適當なるもの、即ち之れ戯曲の適當なる材料なるのみ。多くの人は巢林子が戯曲的人物の、殊に其女性の一般に卑賤なるを咎むと雖も、素より戯曲家として彼の價値を上下するに足らざるの俗論のみ。蓋し想ふに封建時代にありては、社會的階級の區別峻銳にして、上下永く相懸絶し、親和交際の機會に乏しく、嚴重なる慣習の制裁は一般世事をして、一定の樊裏に沈着固定せしむるの傾向あり、此際一個の戯曲家として、人情の眞相を發揮し、大多數の國民に向て一般人間の希望と感情とを表白せんと欲するものは、其材料を比較的尤も自由なる活動の範圍を有せる、中等以下の社會に求

めざるべからず、而して尤も多く人情の痛激なる活動を経験するものは中等以下の社會中、殊に楊臺狹斜の里たるべきは素より論を待たず、果して然らば巢林子が其材料を主として游里教坊の中に求めしは、啻に批難すべきことに非ざるのみならず、却て寧ろ戯曲の目的を達する上に於て最も至當の方便を取りたるものとして稱揚すべきに非ずや。夫の殿上高家の事情を寫すを以て一に高尚優美なりと心得る輩は、未だ共に戯曲を談ずるに足らざるものゝみ、『二本指すを侍、一本指せば町人と計り思ふか、大小は此胸にある』とは誠に彼が戯曲的人物の真相を言ひ盡したるものと謂ふべし。

今若し如何に彼が幾多の貴むべき徳義を以て藝娼妓に歸し、又如何に其薄命悲哀に對して痛切なる同情を表せしかを思へば、予輩は優に彼が心容の博大なるを認むると共に、愈々彼が眼中只天真の人性あるのみな

るを知る也。讀者試に『遊君三世相』を緋け、一般社會が等しく卑しとする遊女の爲、又遊里の爲に、境遇が本性の上に如何の勢力を及ぼすかを示して、函人必しも仁ならず、矢人必しも不仁ならざるの理を及ぼし、以て人爲的階級の必ずしも品格の高下を累さざるを説けり。

偶々人界に生を受けながら、士農工商の家にも生れず、又は琴棋書畫を事とする身にもあらざあるが中にも河竹の遊女は何の報がや。夫さへあるに仕業は憂き流より遣水の果さふらふ。此身のつらさは女郎より尙憂きものとは人知らず、實に好色の世の中に誰が身の上も戀衣、いとしい事と知りながら、身の役なれば君達をさがなくせて逢はせねば、木竹の様に言ひなされ、心の外の罪つくる。勤め寂しき夕間暮。是も遣手の科がとて内の夫婦の鬼顔は苛責の責より猶つらく、此世の地獄の情なや。遣手に種は無きものを、慾より外は知らぬとて、人に疎まれ憎まるゝ、這はるも何の因果がや。

傾城に誠無しと世の人の申せども、それは皆僻言、誰知らずの詞がや。誠も嘘も元一つ、たどへば命抛ち如何に誠を盡しても、郎の方より便無く遠かる其時は、心矢竹に思ひても斯した身な

れば儻ならず、おのづから思はぬ花の根引に遇ひ、掛し誓も嘘となる、又初より偽の動ばかりに遇ふ人も、結ばず重なる色衣、つめの密邊となる時は、初の嘘も皆誠。鬼角戀路には偽も無く誠も無し、縁のあるのが誠がや。

親里を振捨て、扇の影に給仕へ、川中に立とも人中に立たれずと迄賤まれし遊女遣手の心事も斯く折き來れば、元之れ本來一般の人情、偶々境遇によりて其常體を變じたるのみ。巢林子が人性を見る概ね此類なり。されば遊女の娘に五位の局は彼が眼には敢て不倫に非ず、何にぞ故らに古今集と明月記とを引て之を證するを須ひんや。昔者プラキシテールがエヌス神の像を作りしや、其摸型を當時の名妓フリ子ーに求めしが如く、巢林子は其女性を遊女の間求めしは少しも怪むに足らず、彼は遊女の中に人間を見ればなり。

## 二 女子は如何なるものぞ

任他。女子はそも如何なるものぞ。昔の法師が言へりし如く『人家の相深く』願に満たず、慾に慊らず物の理を知らず、而かも頑迷にして訓ふべからず、そもすなほならずして拙きものは女子なるか。『花は咲きながら藤蔓のねじれたる如く』其性は推なべて僻めるか。吁何ぞ夫れ然らん、此等は只すなほならずして僻める一面を見たるに過ぎざるのみ。渠れ僻めるもの無きに非ず、されと渠の情は時として清きこと珠の如く、鮮かなること露の如く、累心剛韻の之に對して愧ぶべきもの有る也。渠れ理に冥きもの無きに非ず、超邁顛脫の才、縷心刻骨の勞は渠に於て見ざるところ、されと無心の裏却て天真の妙理あり、猶斷氷月に對して自ら鏡を爲し、餘雪蕭管に入りて自ら音を發するが如きもの無きに非ず。渠れすなほならざるものあり、されと柔婉温藉、言尙勝ぬす、一枝の紅杏曉露に惱で輕風の來り拂ふを待つが如きあり、誰か女子を偽なりと謂ふ、其

偏に感情的なる一度び情機の動く所、強て虚辭を装ふ能はず、天真爛漫として蕩著する處少し、渠はなべて感情の鏡なり、社會の生ける戯曲なり、一般人生の悲哀と希望とは最も明晰に最も忠實に渠によりて發揮せらるゝ也。渠は實に天成の戯曲的人物なりと謂ふべし。女子微りせば此世如何に寂しかりなむや、哀、情、美はしきもの、樂しきもの、所詮女子を外にして何處より來る。天にありて星、地にありて花たるもの、人にありて女子に非ずや。何物の痴人ぞ、敢て猥りに『革囊臭穢』と罵倒し去らんとする。さるにても思議すべからざるものはスフキクスと女子性情とならん。女子果して柔順なるか、何ぞ其僻めるや、睚眦の怨も渠は執念深く記憶して復讐せざれば已まざる也。渠を以て蛇に比するものは慥に其半面の真相を示せる也。渠の性果して皎潔なるか、何ぞ其陰險耻を知らざるや、動もすれば渠は清きものを惡み、正しきものを疑ひ、幸なるものを猜み、

自利を謀るに倦むことを知らざるなり。臭鼠の鎖尾を捉へて毀憂夜を徹し、成心已に構へて人を待つ、訓諭は只其迷を深うするのみ、渠れ果して智慧あるか、何ぞ其事理を解せざるや、渠は情偽を察せず、利害を窮めず、一氣熱し來れば渠の眼は見る所なく渠の耳は聽く所なく渠の心は石の如く木の如し、渠れ果して怯懦勇無きか、何ぞ其志の一徹にして奪ふべからざるや、威武屈する能はず、富貴誘ふ能はず、節義凜然、鬚眉尙愧色あるものあり。渠は醇なるが如くにして而かも偽なるが如く、驕なるが如くにして而かも謙なるが如く、思慮深きが如くにして而かも行爲謀無きが如し。渠れ畢竟何物ぞ。誰か此スフキクスを解するのエデプスぞ、巢林子は如何に之を解せしか。

### 三 愛と名譽

愛の詩人なる近松は亦女性の詩人なり、愛情は女性によりて最も多く



發揮せらるゝものなれば也、彼は愛を以て女子の本性と爲し、之に配するに名譽心を以てせり。渠にありて名譽心は他人に賞揚せられんと欲する積極的願望に非ずして、只他より悪く言はれざらんと欲する消極的意志に過ぎず。巢林子は此二者を以て女子の二大特性と爲せり。愛を以て女性を説かんとするは素より創見に非ず、只其生ける戯曲的人物によりて其特性たる所以を説明したるもの、古來幾人かある。予輩は巢林子が單に之を認めたるを稱するものに非ず、唯そを實際に描きたるを甚だ多とするのみ。乞ふ彼が如何にして此二大特性によりて女性を活動せしめたるかを見ん。

凡て人間の動作は慾望を満足せんとするの手段として見るを得べし、而して此慾望は女子にありては概ね保守的なり、消極的なり、受動的なり。渠は新しき慾望を満たさんとせんよりは、寧ろ既に得たる幸福を失

はざらんとを務むる也。故に渠の心は容易に外物に適應し、其力の及ぶ範圍内に於て其小やかなる満足を求む。斯の如くにして一度び其満足を得るや、渠は全幅の精神を傾けて之を修飾し、醇化し、美化し、玆に自己の外は何人も想像する能はざる一個の樂園を成就す、運命の前には渠は從順なる奴隸なり。此屈從は渠にとりて苦痛に相違なきも、渠は幾も無く此苦痛の中に幸福と満足とを認むることを誤らざるなり。然れども愛情の前には渠は專横なる君主なり。愛情の自由獨立の爲には渠は生命を賭して之を争ふ。渠は一點塵の之を累はずだも容さざる也。

渠の満足は廣さの中に在らずして、寧ろ深さの中にあり、大さの中に在らずして寧ろ強さの中にあり。故に一朝此満足を失ひたる時は其悲哀自ら深刻にして、其間往々思慮考察の餘地を残さず。之れ女心の『一徹にして思返の無き』所以なり。男子にありては則ち然らず、世界は其家な

り、あらゆる人は其友なり、夙に世路の辛酸を嘗め盡し、人生の流轉に遇て多く驚く所無し、故に心自ら快活にして物に拘泥せず。失敗の後には回復あり、失意の蔭には希望あり、彼は得と失とに對して甚しく關心せざる也、然れども女子は全く之に反す、庭前盈尺の地は渠が世界なり、愛は渠が唯一の希望なり、淵瀬定めぬ人世に在りて平和と笑とを以て此小樊籠に滿志し、敢て外に求むる所無きは、所詮此愛の中に無上の満足を夢ればなり、故に一旦愛を失はんか、日月輝かず、花鳥咲はず、天地は渠にとりて暗黒なり、渠は只剃刀を執て已まんのみ。之れ實に一般女子が性情ならずや。

予輩は巢林子が這般の委曲に深く住心せしことを多とするものなり。げにや彼が女性は無邪氣なり、溫柔なり、あらゆる女性の弱點を有せり、其理性も常に其女らしきを失はず。其關する所は己の身に非ざれば己の

家族なり、此等の事情相經緯して愛情の活動を合成す。故に彼が女性の千緒萬端の行爲の情機は、尋ね來れば一として愛の大根本に歸着せざるは無し。彼は女性に特有なる不注意を以て強大なる愛が理性の光を暗うしたる結果なりとせり。彼は女子にして若し勇氣あらばそは愛の感激に本くべく、女子にして女らしからざる罪惡を犯さば、そは愛の眩惑に因るべきを信せり。彼は又

#### 四 嫉妬は愛の反面

なるを最も明晰に表現せり、蓋し財を欲せざる者は他の富を羨まず、他を愛せざるもの、若くは他を愛せんと欲するの情無きものは、他を嫉妬するの謂れ無ければなり。仔細に觀察すれば嫉妬に二様の別あり、一は積極的の嫉妬にして一は消極的の嫉妬なり。夫の二女子一男子を争ひて相嫉妬するの情は前者なり、若し夫れ自家胸裏の愛情尙未だ其對象を見

出さず、感々として隠に忡傷するの時に當り、他の纏綿たる情交を見る時は、自己が孤介の狀に比して羨仰欽慕の餘り、翻て嫉妬の情となる、所謂法界悋氣なるものは即ち後者なり。今嫉妬と愛情とを較ぶれば一見相貌相異なるが如しと雖も、其實は同一物の兩面に過ぎざること、猶彼の花絨の表面に薔薇の花と刺とを織り成せるものは、裏面にありては素同一の彩絲なるが如し。其花を喜で其刺を憎むものは眞に薔薇を愛するものに非ず、其笑を好で其涙を嫌ふものは眞に人を愛するものに非ず、陰となり陽となるは素之れ偶然の縁のみ、嫉妬と愛とは元來兩岐なし、人は嫉むこと無くして愛すること能はざれば也。

巢林子は己に愛は女子の本性なるを認めたるを以て、同時に嫉妬も亦女子の本性なるを認めたり、彼は強大なる嫉妬は即ち強大なる愛情を證するものと信せるを以て、強大なる愛情を寫すに數々強大なる嫉妬を以

てせんことを務めたりき。『琴のつれびきついまちの歌かるた』に後庭の人を羨殺せし窈窕たる淑女と『愛と妬みと浮世のつらさ』に身も世も忘れ『天も落ちよ地も裂けよ山も崩れて落かゝり世繼が五體碎けよかし』と呪咀せし狂亂の妬女とは抑も何等の相違ぞや、而かも同一玲瓏姫たるに於て失ふ所無し、『取て噛まんと言ましたか』と影なき人に吠えしおまんの、實に取て噛まんまでもお蘭を嫉み、而かもお蘭を嫉みし丈け事助を愛せしは言ふまでも無し。『祈りものけたい戀の敵』に表面の情の偽なりしことは素より『法界悋氣』の腰元共の言を待たず。深窓琴を撫して『夕べくの涙川』を歌ひて厩に懷を遣りし一少女、花情柳態殆ど春に堪えざらんとす、而かも彼れ豈『仇と情と怨念の三つの鐵輪かなわに燃ゆる火に』戀の敵咀ひし小島が崎の狂鬼女に非ずや。  
名譽心は愛を外にして別に存在するものに非ず。女子は男子よりも一

般に名聞を重ず、然れども所謂名譽心の主とする所は其愛の品位と純潔とを保存するの謂に外ならざるが如し。蓋し愛の物たる神秘言ひ難し、予輩自ら其然る所以の理を知らずと雖も、蓋し戀愛の第一義は所詮吾愛する人をして常に自己の心情の純潔なるを知らしむるに存し、他を排して己を利せんとするが如き陋劣なる人我的意志は、自らは實に之を有するも、他をして之を知らしむるは、其最も忌避する所なるが如し。故に其戀人に對しては不仁者も仁者となり、不義者も義者となり、怯夫も勇夫となり、小人も君子となる。戀する人にとりては其愛する人に賤めらるゝ程苦しきこと無ければ也。故に日夕奕々として憂懼する所は、其戀人が自己を輕蔑するの理由を發見するにあり。今夫れ愛情ありて茲に嫉妬あり、嫉妬は愛情の反面に過ぎずと雖も、畢竟利己排他の願望に外ならず。故に他の爲に自己が嫉妬の情を知らるゝは即ち自己の卑陋なる心事

を表白するに異ならず、況して其戀する人の爲に之を知らるゝは即ち己れが愛せらるべき價值無きことを自らの口より懺悔すると一般なりと謂ふべし、之れ戀する人が其全力を傾けて嫉妬の情を掩蔽し、具に靜平を装はんと務むる所以なり。

得意の愛は女子の最大幸福なるが如く、失意の愛は其最大不幸なり。而して得意の愛より生じたる幸福は女子の最大名譽なるが如く、失意の愛より得たる嫉妬は其最大耻辱なり。是故に女子の名譽心は主として他の前に其嫉妬の情を抑制し他をして之を覺らざらしめんとするの盡力に存す。故に名譽心も亦愛情に本くものにして、之を喩へんに一度び反射したる光線の如し、其進行の方向は全く相反するも、所詮其本體は愛情なり。蓋し愛は女子の實性にして名譽心は假性なり。愛は放縱恣睢にして節する所を知らず、之を抑制し調和するものは即ち名譽心なり、愛は多

く、破、壊、的、に、し、て、名、譽、心、は、多、く、構、成、的、な、り。作、用、に、於、て、は、愛、は、常、に、積、極、的、に、し、て、名、譽、心、は、消、極、的、な、り。『所謂まゝならぬ』とは愛が名譽心の束縛を脱せんと欲するの歎聲にして、所謂『浮世の義理』とは名譽心が愛を抑制するの羈絆に外ならず。仔細に巢林子が女性を観察すれば予輩は此二者が女子の胸中に輾轉反側して相煩悶するの情状を見るに難からざる也。

## 五 『天の網島』のおさん

乞ふ予輩をして巢林子が女性の一例として『天の網島』のおさんを取らしめよ。蓋し之れ彼が女性中最も善く寫されたるもの、一なり。抑もおさんや、夫治兵衛の放逸度なきを憂へ、小春に乞ふに治兵衛との縁を切り呉れんことを以てせりき。良し其口を藉る所は如何に立派なるにもせよ其形跡の嫉妬に類することは争ふべくもあらず、家の爲、夫の爲に

と言へる口の下に誰か『我身の爲』を認めざるものぞ、『嫉妬は女子の役』ながら、他人、殊に愛の競争者とも謂ふべき小春に、明々地に斯る事を表白するは非常なる耻辱に相違無し、渠女は此時其名譽を擧げて小春の掌中に托したる也。此忍び易からざる耻辱を忍び、此爲し難きの事を爲したるは、勢洵に已むを得ざるに出づ。必しも小春を信じたるに非ず、必しも其然諾を豫想せしに非ず、されば殺活浮沈の機、實に小春が一片應答の上に懸れりしなり。小春が義理を重じて其依囑を容れ呉れしを見て、おさんは如何に其高義に感せしぞ。此大耻辱より己を救ひたる小春は、今や渠女が大恩人となれり。渠女は今や治兵衛と共に小春を愛せる也。先の嫉妬の心は今や純然たる友愛の情となれり。是を以て夫の述懐を聞くに及び

ヤ、夫れなれはいと、小春さんは死にやるがや、



いとしがらしのみ。女子の名譽を賭して一切のこと小春に打明けしも、小春の情義に感じて眞に之を憐むに至りしも、はた家を傾け産を蕩して小春の死を救はんと務めしも、所詮治兵衛の愛を復したるが爲のみ、若くは少くとも復すべきを信じたるが爲のみ、渠女は一切の事物を釣懸して以て其夫の愛情に換るに忍びしなり。一言すれば渠女が小春を愛せしは治兵衛を愛せしが爲也、若し爲に治兵衛の愛を失はんとすれば渠女寧ろ小春を憎まんのみ。『女子は吾れ人一むきに思ひかへしの無きもの、』小春を救んとする念の切なる、渠女は自己の身も治兵衛のことも全く忘れたり。『請け出して扱其物は』の一語と共に、渠女は一彈指の間に其現實の境遇を自覺せり、而かも痛切に自覺せり、吁小春を救ふは即ち治兵衛の愛を失ふ所以なるを覺りたる此刹那にありて、渠女の心臓は如何に鼓動し、渠女の血液は如何に逆流し、渠女の問題は如何に錯亂せしや、いか

いぞ『はつと行當』らざるを得んや。予輩は思ふ此際渠女が眞の『我』は殆ど此計畫を放棄せんとせしに非ざるか。只名譽の一念渠女を驅りて此小献身的義膽を顯はさしめしに非ざるか。自己の現境を自覺して『アッアそふじや』と悟りたる渠女の心中は忽ち名譽と愛情の争鬭を示し、渠女をして『ハテ何とせよ』と歎息せしめたり。『子供の乳母か飯焚か隠居なりともしませよ』言ふに至ては渠女の心中に於て流石に名譽の一念の遂に愛情を抑制したるの蹤跡を見るなり。洵に自然の經行と謂つべし。乞ふ予輩をして女子の特性の一なる不注意をは近松が如何に寫せしかを觀せしめよ、其一例として、

#### 六 『出世瀧徳』の吾妻

を取らむ乎、渠女は其情郎の窮困を見て其いとしさに堪えず、咄嗟の間に二百金を調達すべきを受合へりき。身はまゝならぬ遊女なり、そも

如何にして斯る大金を調へんとせる。げにや渠女は何の術も知らず、又考へず、恐くは然諾の刹那にありては其出来得べき萬一の望だに胸裏にあらざりしならん。而かも渠女は漫に口舌を以て受合ひしにはあらで、満幅の誠意を捧げ、斷々乎として其必ず調達すべきを決心せりしなり。其能ふべき望だに無く、去かも斷じて人と契る、そも何等の不注意や。是れ猶不合理なる大前提より合理的結論を予想するが如し、勢ひ不合理なる小前提を用ひざるべからざる也。吾妻が藤五郎を殺せるは實に自然の結果のみ。藤五郎の胸上に跨りて白刃を擬し

御身に恨も罪もない、假にも惚れて呉れた人、殺したうは無いわいな、殺さるゝ御身よりは殺す我身が悲しい、涙は及に傳へしか、なう生置いては請出して女夫になるが情ない、私には大事の男がある、其男と縁切れる戀路の仇となる故に今刺殺す、懐中の小判は貧な男に遣りたい、殺生の罪、盗の罪、男の爲につくる心、少しは恨を晴れてたも。

と辨解するに至ては何ぞ其心のやさしきや。そもや渠女は人を殺して後は如何せんと思へりしや、絃歌の地人を殺して身の全きを得へしと思へりしか、將た其罪に連座せざるまでも、盗み得たる金の却て情郎の累と爲らざることを如何にして知り得たるか。心なきも甚しきかな。然れども深く怪むに足らず、吾妻は其戀人を以て其他を見ざれば也。『殺生の罪、盗の罪、男の爲に作る心』。既に此一事を意識す、渠女は天地に俯仰して疚しき所なし。愛はあらゆる罪の辨解者なればなり。書して茲に至れば予輩はヘスター、プリンが、

吾等の爲せし事は其れ自らの純潔を有せり。(What we did had a consecration of its own.)

(—Hawthorne's Scarlet Letter)

を想ひ出さずんばあらず。あゝ、此世にありては罪と愛とは常に不幸なる。伴侶なり。吁之れ愛の罪か、社會の罪か。



七 『槍權三重帷子』のおさい

『槍權三』のおさいは最も善く世に有勝ちなる女性の不注意を示せるものなり。渠女は貞操に於て缺くるあるに非ず。其夫を思ふの情は普通の女子よりも寧ろ篤且實なるものあり。只其心愛情に充てるを以て其舉措は總じて愛嬌あり過ぎるなり。而して渠女は斯る性質の女子が以て其身を節制すべき嚴格なる素行に乏しきなり。一言すれば渠女はしまり無きなり。おさいは流石茶人の妻、物好もよく氣も伊達に、三人の子の親でも、きやしや骨細の生れつき、風忍はしく床しくの、三十七とは見ぬざりし。

數句能く其人を爲りと容貌とを寫し得たりと謂ふべし。渠女は其娘お菊の年十三なるに權三を添さんと欲し、頻に權三の器量を褒めたる後、お菊の娘氣に結婚を否むを見、

そなたがいやなら母が男に持つがや、ほんに市之進殿と云ふ男を持たねば、人手に渡す權三様じや無いわいな

と事も無げに言廻せる氣輕さよ。斯る言語は苟も人の母たるものが其子の前に於て發すべきものならんや。權三に遇て其娘と結婚の約を結び

まづ娘には遇はせませぬ。私に似たらば倍氣深からふ、脇へ心散らす一筋に頼みます。悪性があつたらば此姑が倍氣の腰押し。お持たせの名酒お前と私か此樽にかう手をかければ、契約の盃した心

蕭洒冷靡の態度、之れ謹厚の女の爲すべき所に非ず。權三が茶の湯の秘書を見んことを請へるを許し、其人越在の空宅に於て深夜引見の約を爲すに到ては不注意も甚しと謂ふべし。而かも渠女は自ら其しまり無きに心付かざる也。約を履み夜を冒して來るに遇ひ、『直に數寄屋へく』と手燭片手に傳授の箱二人忍びし有様』は、伴の承ならざるも誰かは『影は障子に男と女、忍びぬふ夜の私語』と疑はざらんや。而かも渠女は其不注意に心付かざる也。權三が他に情人あるを知りて嫉妬の念に堪えず、

是れ見よがしの其帯は定紋の三つ引と其菊とふじたるい引並べ、誰が縫た、誰が遣つた  
 と問詰め『之には様子がある』と言へば、『様子といふが妬ましさ』と泣き  
 つき、腹立まざれに權三が帯を解て中庭に投じ、權三が庭に下りて之を  
 拾はんとするを引とめ

あゝ帯に名残惜いか、不肖ながら此帯なされ、一念の蛇となつて腰に捲付き離れぬ

と叫ぶに至ては狂態極まれりと謂ふべし。惟ふに嫉妬の一念は渠女が爲  
 に渠女自身の別世界を作りし也。其眼中に只其娘の愛あるのみ、否己が  
 胸に燃ゆる愛情の焰あるのみ。渠女を圍繞せる天地は滅したり、渠女は  
 最早や現實界の人に非ずして理想界否寧ろ夢幻界の人となれる也。何の  
 違ありてか屑々たる俗縁に拘泥せんや。深夜空屋に美少年を引入れて、  
 少しも顧みず、喧争席を擾し衣襟寛濶して少しも憚らず、伴の丞の爲に  
 權三と己の帯を拾はれ、『市之進女房笹野權三不義の密通』と高呼せらる

も尙少しも恐れず、渠女は其内心に對して疚しき所なければなり。流石  
 は權三は男子なり、『南無三伴之丞、弓矢八幡遁さしと刀引抜き障子蹴破  
 り飛出で』しが其嫌疑の遂に釋べからざるを知り、自殺して其身の潔白  
 を示さんとせり。おさいは是時如何にせしや。渠女は尙昏々として其理  
 想界に夢みつゝあるなり。權三の煩悶は渠女に於て解すべからざりしなり  
 されば渠女は亂心の人を諭すが如き口氣を以て驚慌權三を止めて曰く  
 此やどうじや、不義者は伴之丞、身に曇り無いお前に何の過り死なうとは

可憐なるおさいは只中心の清きを見、心以外別に社會に制裁あることを  
 忘れたる也。一言すれば渠女は其身の實境を自覺せざる也。權三が

ア、おろかな兩人の帯を證據に取られ、癡亂れ髪の此體、誰に何と言分せん。もう侍も廢つた。  
 御身も人畜の身となつた。エ、く無念や

と憤慨するの刹那、おさいは俄然として初めて現實界の我に復れり。是

と同時に渠女は恐るべき而かも動かすべからざる未來の運命の宛然とし、眼前に横はれるを見たり。渠女は落膽せり、戰慄せり、悲泣せり。猶之れ深宵床を離れて夢遊せし人が忽然醒め來りて身の何時しか萬仞の斷崖に懸り、進退活路なきに心付き、且惶れ且悲み爲す所を知らざるが如し。

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

之れ世界に於て尤も悲しむべき語の一なるべし。『扱は』嗚呼何ぞ此『扱は』の遅かりしや、渠女は人の妻として、人の母として、はた一個の女子として、享受し得べき過去現在未來の三世に渡れるあらゆる希望と幸福とは擧て此悲むべき一語の犠牲と爲り了りたることを痛切に自覺せり。而かも一死以て冤枉を雪かんと欲し尙後顧の情に忍びず

思はぬ難に浮名を流し、命を果すお前もいとしいが、三人の子をなした二十年の馴染には私し

やかへぬが

と言ふに至ては人情最後の絶調、予輩毎に巻を掩て言ふ所を知らざる也」女子を殺すものは愛情のみならず、名譽心亦之を能くす。巢林子が世話物中の女子は多少名譽心の爲に動かされざるもの無し。

八『宵庚申』のお千代

は其最も適切なる一例なり、渠女を殺したるものは實に名譽心に外ならず。

『宵庚申』は他の心中物に異なる一種の特色を有する者なり。げにやお千代は情に死せり、されど渠女が半兵衛に於けるは、小春の治兵衛に於ける、お房の徳兵衛に於ける、若くはおさがお島の嘉平次八郎右衛門に於けると、同一の關係なるか。否々、然らず。要するに彼等は愛の爲に死したりき、されどお千代にありては則ち然らず、『かるく』ながら

三度の嫁入に、心詫しき跡も見せず、或は飽かぬ別れに浮世を啣ち、或は歸らぬ死出の途に夫を送りて、身は萍の定めなく、縁も因もなき半兵衛に嫁してより僅に『足かけ二年』、長し』お腹に四月唯もない身』なりとも、予輩はかゝる夫妻の間に純潔無二の愛情の存しがたきを思はざるべからず。但し相縁奇縁の世の中に渡頭舟を同うして一見傾蓋の思あるものなきにしも非れども、そはまことに例外の事のみ。そもや夫の留守に暇をくれる姑心、お千代誠に半兵衛の愛を解せば、毫末だも其夫を恨む由やある、何事をも知らぬ半兵衛が其家に立寄りて『ヤアお千代爰に居るか』と呼はりし時に、眞に膠漆の情ある夫妻ならんには、當に急遽走り寄り相抱て衷情を訴ふべし。一言の挨拶だにせず、夫の言を『聞捨て物をも言はず、直と入り障子をはたと引立』たるお千代の心中には、幾何眞に半兵衛を愛するの情ありとするや。渠女の眼には半兵衛は『去状さま』と見え

ざるまでも、其故を問はゞ少くとも『譯聞きたくば此方の心におとひなされ、人の知つた事の様』と空笑せんこと疑無し。如何ぞ嬌羞好で人を避くる少女を以て、三度び家を換へしお千代に擬するを得んや。お千代は半兵衛が己を知れる程だも半兵衛を知らざる也。『足かけ二年の馴染、子までなしたる夫の心、知ても言譯して呉れぬか』と怨みし半兵衛は、少くともお千代を買被りしなり、お千代は曾に眞に半兵衛を知らざりしのみならず、彼を疑へり。祇王を以て己に擬せし渠女は眞に暴戾無情なる清盛を以て半兵衛に擬せしならん。渠女は清盛に泣きしにあらずして『定め無き男女の習』に身の薄命を寄せしのみ。人已に相信せず、疑心早く情を隔つ。其間如何を眞の愛情なるものを容れんや。お千代己に眞に半兵衛を愛せず、愛情の力は以て渠女を殺すに足らざるなり。然らば則ち何物か渠女を殺したる。名譽心是なり。

予輩の先に言ひし如く愛は女子が精神的生命なり、是を以て愛の品位と純潔とを保つは勢ひ女子が第一の動機にして、苟も之が累を爲すものは其最大恥辱として忌避する所なり。愛の純潔を累すの大なる蓋し離婚に若くもの無かるべし。結婚は女子にとりては猶愛情の試験の如し。之に落第せるもの、即ち離婚せられたるものは、即ち公然事實の上より女徳に於て缺くる所あるを證明せられたるものに外ならざればなり、其内情は如何にあれ、お千代は一度ならず、二度までも、此試験に失敗せるものなり。女性の名譽の上に二回の大打撃を被れる渠女は垢を含み、恥を忍び、其最後の運命を半兵衛の掌中に委ねたり。是時に於てお千代の胸中を察するに、恐くは只其名譽を回復するに之れ急にして、夫に對するに、愛情の如きは太だ生心せし處に非るべし。猶之れ數回の試験に失敗せる學生が偏に及第をのみ希望し、其成績の優劣等に就て特に注意する

所なきが如きなり。想ふにお千代は半兵衛の愛を維持せんが爲には出來得る丈けの力を盡したるべきこと素より論無し、されば之れ素半兵衛に對する眞摯なる愛情より出でしに非ずして、只彼の愛によりて夫妻の關係を固うするに在りしこと亦敢て疑を容れず。故に半兵衛を愛せしと言はんよりは、夫妻の關係其物を愛せしと言はん方一層妥當なるべく、夫妻の關係其物を愛せしと言はんよりは其身の名譽を愛せしと言はん方尙一層妥當なるべきなり。之を以て一旦姑の爲に是非なく離縁せらるゝや、半兵衛の眞意如何の如きは問ふに違あらず。表面上夫妻の關係無き以上は、渠女は路傍の人よりも太だ多く半兵衛を愛するの意なきなり。宜なる哉半兵衛に逢て『物をも言はず障子を立切て』遽々然として立去りしや。

さはれお千代の表情を想ひ遣れば眞に憐むべきものあり。生れて女子

となり誰か愛情なからん、お千代や二度び其夫に見え、生離、死別、幾度か其棲を變て、而かも其居を安ずる能はず。渠女實に愛せんと欲するも、愛すると能はざりしなり、猶春に後れし蛺蝶、風に折れ霜に瘦せ、秋氣落莫として徒に衰殘の黄花を擁するが如し。渠女の半兵衛に於ける、愛せざりしに非ず、實に愛するの力無かりしなり。渠女の爲し得る所は只其毀損せる名譽を回復せんと務むるのみ。進では愛する能はず、而かも退て名譽を保つ能はずんば、お千代たるもの只一の死あるのみ。柔婉温藉なる女子の身を以て、慘酷無慈悲なる社會に立ち争でか、此大耻辱を忍び得べけんや。已に愛を失へるや、お千代は半ば死せり。名譽を失ふの日は即ち其全く死するの日なり。『心中宵庚申』は實に此半死の人が苦悶して全死に終るまでの一大悲劇なり。

『五月雨ほと慕はれて今は秋田のおとし水』、三度迄去られし身の三界

に住むべき家なく、戻るは元の親の家、『駕籠の戸明くれは打淵れ、目元しほる、縮緬の二重廻りの抱帯、涙の色に染かへて泣くく出』でしお千代の心中はそも如何なりしや。姉の間に包み得で『耻か、しや又去られて』と答へし渠女の胸をば、離婚の一念は如何に蛇の如く纏ひ苦めけん、

なうお千代、五度三度の聲入嫁入も世にある慣とは言ひながら、悪いことは手本にならぬ耻かしい口で言ふ計りが耻を知つたと言はれふか、和女もかるく三度の嫁入、尤始めの男道修寺町伏見屋の太兵衛殿、心おしように身軀を持つし、たゞみもない様に成りあかぬ別れ。其次は死別れ。互に難は無けれども、人は和女の辛抱がないうへに去られたくと批難付、此度の嫁入も追出さるゝに間もあるまい、忘れて島田平右衛門が娘の風下に居るなど、娘持た人々は密合茶吞咄にも和女の噂。ま一度戻ては親兄弟人中へ顔が出されぬとは知りぬいて火に入骨を碎かるゝとも歸るまい、ヲ、必ず去られて戻るなど、念に念をつがふた今度の嫁入よう戻りやつた、父様おきなされたらお悦びなされうが、

お千代はそも如何なる感情を以つて姉が此諷誡を聞きしぞや。『耻かしい

恥かしいと口で言ふばかりが耻を知つたと言れふか』とは渠女の耳には何にぞ『死んで耻を知れ』と迫らるゝに異ならんや。

心は若かりし昔にかはらず氣も強く、義理にもひかれ、おのれ重ねて去られたらば顔も見まじし、物言ふまじとの我もありしが、六十に足踏込ては年計りよるでなく、月もより、日もよつて、病にからまるゝ、身の衰る程、彌増に案じらるゝは子の身の上、三度はおろか、百度千度去られても、去らるゝに定まりし前世の約束と思ひあきらむれば悔もせぬ、憎うも無い笑ふ人は笑ひもせよ、譏らば譏れ、指もさせ、子の不憫にはかへぬぞ

今更合す顔もなき老父が思もかけぬ慈悲の語は憤怒嘲罵の聲にもまさりて如何に痛切に、如何に激越に、渠女が少き胸に響きしや。吾身一つは忍ぶべくんば則ち忍びもせん、行末長からぬ老父が名譽と幸福とを抛て猶且此不孝の身を愛し給ふ、風下だにも嫌はれし家門父兄の恥辱を思へば多恨なる渠女は必ずや『吾なかりせば』と思ひしならん。想ふに自殺の一念は既に此時よりして其胸奥に胚胎せしならんか。思ひがけなき半兵

衛が『盡未來まで女夫』の一言に驚喜度を失ひて。倉皇旅装を束ね歸らんと言ふ嬉しさに親の病を何とも言は『ぬ』しとなす』は渠女に於て敢て怪むべきに非ず。何となれば渠女は如何に孝順ならんと欲するも去られたる身は已に最大なる不孝不順の子となり了りたるを知ればなり。半兵衛の一語は永劫の墮落無限の罪惡より渠女を救ひたる福音なりし也。あらゆる渠女が幸福は擧て此一語の中に包含せらる。父の病又渠女に於て何かあらん。孝子となり、貞女となるの第一義は實に此一語の中に存すればなり。

可憐なるお千代は斯の如くしてやがて落膽すべき暫時の希望を夢みたり。姑の邪慳、半兵衛の苦心は少しも知らず、底まで見ゆる詐りに、其身ばかりの誠を寄せて、再び夫の家に歸り行く。今にも來む嵐の前に戯れ遊ぶ胡蝶の如しとも見るべくや。半兵衛が涙と共に一切の事實を打明すを聞き

エ、イ、サ、リ、ヤ、と、ふ、で、も、去、ら、る、か。

思はず叫びし一語は如何なる斷腸の響や。此一語と共に渠女は其最終の希望に離れたり。一切の苦心は空々如として泡沫の如く涙の外は何の痕もなく消え去れり。上田村より歸り來りし暫時の月日は眞に一場の夢に過ぎずして。一旦覺め來れば身は依然としてお輕に耻しめられ。金藏になぶられし故の我なりき。而かも一切の情實明になりて、前には義理の刃に向はん術も無く、後には二度び焚火せられし門に戻らん途もなく、進退維れ谷まれる今の我なりき。お千代にとりては此一語は之れ最高の法庭に於ける死刑の宣告に外ならざりしなり。吁々愛は失はれ。名譽は毀たれ、倚るに人なく歸るに家なし。三界牢廓として夫れ何くんか適かん。高絶無情の天を仰で感愴すれば人は只一死あるのみ。お千代の如き眞に憐むべき哉。

以上は巢林子が女性に就て予輩の觀察せし要點なり引例遍からず文理共に至らざるも庶幾くは大體の經行を知るに足らんか録して大方の批判を俟つ。明治二十六年五月稿

詩的の兩面と其利弊

誠に美はしきを美はしとのみ打見やりて樂み得べくむば、世に人の罪の如何ばかり少かりけむ。又物の美はしきを鏡の裏の姿とのみまもりて實世間の事にいさゝかも關はらざらむには、世の人のいさをしの如何ばかり微かなりけむ。

人の心は一つにて。物の觀方には二つあり。美を樂むの情はそを我が物にせむとする思ひと、相は變はれとも體は同じ。其埒やゝもすれば外れて二つのもの互に交はる、げに人の罪もいさをしも共に是れよりぞ初ま



る。

吾れ史を讀みて人間の大事は美的空想の所生なることを思ふや久し。げに志高き人の美はしと觀む程のものは、現在の時と處と離れて一往我理想の界に赴くなり。夫の世事破れて補綴に遑無き時、かゝる理想の摸型に投じて世の有様を改造せむと企つる、所謂革命の幟を樹てしものこそ不世出の偉人として千古に稱へらるべけれ。すべて斯らむ人はおのが理想をば美はしとのみ見て靜に樂むべきに非ず、更にそを我が物にせむとて動けるなりき。

是れ詩歌或は美的空想の利益の一面なり。

革命、自由、獨立の歴史の何れか、かゝるためしに非るべき。クロムエルは言葉無き詩人、其革命の空想は形なき歌なりき、彼れに代りて歌ひしものはミルトンなりき。其歌の響を反へしたる國民は。そを歌として

のみ讀まず、歌としてのみ樂まず、形ある生命ある人と世とをもて、是詩の理想を現はさむと務めたるなりき。

モンテスキュー、ゾルテール、ルソーの自然主義は誠に美はしき詩歌なりき、彼の時デカールト以來の哲學は幾多の學系を産みけれども、人はたゞ新學語の送迎に忙殺せられんとす、倫理の標準は學說の浮動と共に萍の定めなく、宗教は其新しきと舊きと共に是を統一するの力無し。文學界に於ける『センチメンタリズム』は益々是紛糾に油するのみ。あはれ是時『自然に歸れ』と唱ふ、誠に野に呼べる人の聲なりき、帝王にも乞食にも同じ價を附くる程の平等と自由とをば、如何なる詩人か是より明に歌ひ得べきぞ。心の渴へたる時の人には、是れやがて精靈のバプテスマなりき。彼等は詩歌として是を樂むのみをもて足れりとせず、是世と是國と是人とを是福音に稱ふものに造り更へむと望みたるなりき、所謂佛

蘭西大革命は其結果なりき。されは是革命のまことの意味は。斷頭臺上のルイ十六世に在らず、ダントン、マラー、ロベスピールにあらず、將た又全歐洲の侮りとなりたる佛蘭西が忽ち起りて其政體を變更し、那の如き短日月の間に全大陸を其鐵蹄の下に踏みにじり、近くはカル、大帝の領土を超駕し、遠くは人をして羅馬帝國の全盛時代を想起せしめたる奈翁帝の大勢力にも存せず、まことは佛蘭國民の其血潮といのちをもて綴りたる、形もある一篇の大叙事詩にてありしなり。

自由戦争時代の獨逸は、かゝる例しの幾個をば吾等に示めしき。まことに奈翁の苦しめより奮ひ起りて是國の獨立戦争を全うせし國民は、其キヨル子ルよりも、其アルントよりも、其ルユツケルトよりも、大なる詩人なりき。人は其自ら想像したる詩中の人たらむとて其劍を執りぬ、祖國の青山に其一字を刻まむが爲めに喜びて其血潮を綴りき。彼等

のキヨルネルはいみじくも歌ひき、『是れ王家の關り知る所の戰に非ず、十字軍なり、神聖戦争なり。』と

當時の獨逸人の心の底には大なる詩歌の流れあり、多くの詩人の歌は其うはべに現はれたる波紋に過ぎざりき。キルヘルム、フオン、フムボルトによりて組織せられたる伯林大學が、ヘーゲル派の哲學の傍らに是國民運動の爲に其有名なる羽檄を草せし時、鑛山學士にして劇場詩人なるキヨルネルが其父に告別して、『祖國我を招く、今や筆を抛て劍を執るべきの時來りぬ』と呼はりたる時、フリードリッピ、シユレーゲルが其有名なる *Freiest von Schuld nicht Einer* を叫びし時、哲學者なるフヒヒテが其死に臨み來因河邊に於ける獨逸兵の勝利を聞きて、『吁我病愈えたり』と喜びし時、吾等は全獨逸の人心に大なる詩歌の炎を見る。げに大なる詩歌ならずや。其妻と子と親との爲に涙を濺ぎ、祖國の自由の爲

には、血を流せる詩歌は、あはれ大なる詩歌ならずや。血も涙も是偉大なる感情の熱火を鎮むるに足らざりしなり。

革命の歴史、戦勝の歴史は到る處にかゝるためしを示めせり。北米獨立是の如くにして成されたりき、宗教革命も是の如くにして成されたりき、我が維新の改革も二十七八年の大勝も何れか是の如くにして成されたるに非ざるべき、げに人はゲーテが言ひけむ如く其詩中の人たるに於て最も大なるを得べければなり。

されど經世の眼をもて是を觀れば、斯らむは詩歌の利益の一面なり。事に實世間に従はむものは更に其弊害の他面を見ざるべからず、人の大なる謬り大なる罪は是けじめを看過するの弊に座すること慙しとせず。歐洲文學の歴史を讀める人には言告ぐるまでも無し、嘗て是世紀の初めに中世派ロマンチクと名けられたる思潮ありて或時はほどく全歐羅巴の人心

を支配せしことありき。さて佛蘭西大革命、及びそれに續きたる奈翁の暴力とによりて、大陸諸國の文明は殆ど其根本より撼かされ、物質の上にも精神の上にもありし秩序の破れたる様は、嵐に靡ける枯野の如くなりき。人は漸やく其呼吸に苦しみあるを覺へぬ。見渡す限りの天に望みの光未だ地に上らず、十九世紀の新文明の何物なるかは容易く認め得べからざりき。時の人は等しく嘆嗟の胸に思ひけるは、あはれ過ぎにし昔の慕はしきかな、任俠を經とし、愛情を緯とし、基督教的博愛主義を以て是れを潤色したる所謂中世騎士の氣質の如きは、洵に烟を隔て、天上の界を望むが如し。今の世の殺伐無味なるに較ぶれば、中古の風尚人をして覺えず神往せしむ。中世派はやがて是氣運に乗じて人心の革新を企てぬ。要は尾花枯れ伏す當代の野に、中古文藝の典雅なる花を植ゑ付けむとするにありき。

されどこれは歴史の上にこそいみじき縁りもあるべけれ、まことは謂はれ無き業なりき。否、詩歌の空想として靜に樂まむにはこよ無き料ならむも實世間に寄せたる望みとして見る者あるに及びて徒に世の亂れを加へたるのみなりき。過ぎし世は引きしほりたる梓弓、放てば再び返へすべきに非ず、中世派の詩歌亦正に此思想を表はしたるものなりき。

中世派の文學は其空想をばまたく悟性と離さむとするなりき。所謂『フアンタスティク』の文學なりき。其詩歌には形の整へる無く、其人は個性と云へるものに乏し、唯夢の如き事柄の中に限りなき渴望の鎖を繋ぐのみ。さればこは、まさしく理性を没し、個想を没し、唯美はしき空想の中に混沌たる感情を樂まむとするなりき。是に於て昔がたりは歴史に代り、傳奇は小説に代り、實世間の一切は詩料に適はずとして斥けらる。あらゆる理想は過去にあり、喩へば白日の明確を捨て、月夜の漂渺たる

をのみ喜びぬ。

月の夜を美はしきのみ觀て樂まむは妨げじ、たゞそが爲に日の光を醜しとして斥けむ人あればこれ詩歌の空想を移して實世間に擬するものなり。詩歌の弊はこゝに起る。あはれ中世派の詩人の中是弊に連座せしもの幾人ぞや。チーク是ならずや、リヒテル是ならずや、ユーゴー、カーライル是ならずや。彼等の作の中にはまゝ大なる思想あり、唯其現世に寄せたる望みは極めて淺薄なり。所詮樂むべき筈の詩歌をば現はさむと務められたばなりき。

こは一つの例のみ。げに是はじめを忘れたるが爲に、賢きものも愚かなる者となることあり、愚なるものも賢き物となることあり、本く所は利弊孰れをどれるかによる。

總じて言ふ時は、形ある感覺美には人は是差別を忘れ難し、そを忘る

い。は。形。な。き。空。想。美。の。場。合。に。多。し。

美人の美はしきに憧れて、それを我が有にせむと思ふはあるべし、されど爾か思ふ折にも、其美はしきを樂む心とそれを我が有にせむ心とは、また異なることを大方は自覺するなり。唯形なきもの、例へば神、祖國、戀愛、道義と云ふが如きもの、場合には、是二者の境域甚だ明ならず、隨うて其美を樂む心は知らず、それを實にするの心に移りゆき、己れは美感の中に止まれりと思ひながらも、まことは實感の部に入りて、利慾のしもべと爲れる例し世に珍らしからず。詩歌の利害は共に概ね是折に生ず。

されば愛國の歌に感激して覺えず劍を執て起つものは、其行爲が明瞭なる理性の分別に本かざる限り、樂むべき筈の歌をば誤て現はさむとし知らず、實世間の利慾の巷に走り入れる者なり。試みにかゝる人の心

を察すれば、其血を流し命を殞す際にありて、己れの身命を捧げてだも露悔しからずとする所のものは、或は詩歌の理想美ならむ。是美を樂むの心は、何時しかそれを實にせむとするの心に移りゆけることには思ひ到らず、又其詩歌の理想美と實世間の現態とは如何の關係に在るものなるや等に就ては毫も悟る所無かるべし。

是の如く詩歌の空想美に同感してそれを樂むと、是に反應してそれを實にせむとするとは、即ち吾等が所謂詩歌の兩面のはたらきなり。而して是に反應して其空想を實にせむとする心は、意識としては一つながら、其實世間に及ぼす影響の上にては更に利弊の二面あり。其利の喜ぶべきこと猶ほ其弊の思むべきに均しきこと、己に例を引きて説きたるが如し。吾等は是所謂美感と實感との混合を以て、敢て純美の成立を害するものとは言はず、是事に就ては他の場合に臨みて別に説くべき説あり。只茲

には實世間の見地より其弊の意外の邊に存するを説かむとするのみ」  
 吾等は詩歌、宗教等をば人心中の同種類の作用に出づるものとなす。  
 即ち旨として實驗知識以外に構へたる想像の上に立つものは、其形に於  
 ては多少の差あらむも、其實に於ては等しく人心の情的作用に出づるも  
 のとなす。さればそを構ふる動機となるものは、主として美を樂むの情  
 にあり。詩歌小説は言ふを待たず、宗教も亦是と少からぬ因縁を有する  
 を見る。さるからに宗教の本義は樂むにありて現はすにあらず、樂むべ  
 き筈のものを現はさむとするに及びて遂に詩歌通有の利弊を見る、獨り  
 宗教のみならず、道義に關する諸種の空想、例せば自由と云ひ、博愛と  
 云ふ如きものも、そが情の産物なり限り、素樂むべくして現はすべきも  
 のに非ず、現はして利なしと云ふにあらず。其の弊あらむを慮れば也」  
 誠に道徳に關する空想美の如きは、是利弊の尤も大なるものなり。そは

其高尚深遠なるらしき狀あるが爲に、吾等が是に對する反應の情に一段  
 の強さを加ふればなり。

吾等湘南に遊びて鎌倉覇府の舊趾を訪ひ、厚打の立烏帽子に萌黃の狩  
 衣着け、黒金卷の無反を横へて鐐釦の鞍に打跨り、青額の僕に水口とら  
 せたる武士、或は烏帽子に小結して絹紋紗の直垂に白き大口の袴を張ら  
 せ、白金造りの細鞆を佩きたる貴公子などの徘徊する古を回想して、更  
 に由井ヶ濱に紅髯兒徘徊し、八幡宮前に汽笛の聲喧しき今を見れば、其往  
 日の何となく美はしく懐かしきを覺えなむ。然れば其美はしく懐かしき  
 が爲に誰れか今を革めて古となさむとするものあらむや。而かも、道義  
 の事、其現實に相應はしからざるは鎌倉の今昔にも等しきものから、猶  
 ほ現實の主義として多少の貴むべき理由あるが如く見ゆることあるは、  
 畢竟道義其物の無形無聲にして其美を樂むの感とそを實にせむとするの

情。ど。の。境。域。一。目。瞭。然。た。ら。ざ。れ。ば。な。ら。む。

されば今の、人平等を説き、博愛を説くや、説者聴者共に其の美はしとのみ眺むべきものを誤て現實にせむとするの過なることを自覺せず、それを稱へて高尚となし、深遠となす。而かも今の鎌倉を立帽子時代の鎌倉となさむとするの痴と相埒するを悟らざるなり。又世に『一國の強大なるは土地權力の大にあらずして大人物を有する事なり』、『一美術家の巧妙なる製作は一國家の富よりも貴し』、『沙翁は英國よりも印度よりも貴し』など、我は顔に言ひなすものあり、是等は一箇の詩的空想としてもしくは語様としては其美はしきを美はしとのみ見て樂むべきものならむ、然れどもそれを賢げに又高尚らしく、一個の實世間に對する主義として主張するものあらば、其痴態寧ろ憫笑すべからずや。

されどかゝる一面の弊のみを見て其他面の利を顧みざらむは、經世の

爲として其策を得たるものならじ。吾等是弊を捨て、其利をのみ收めむと欲せば、詩歌小説宗教等に就きて美を樂む心とそを實にせむとする情との間に明確なる境界あるを自覺せざるべからず、而して是境界を超て其利弊の孰れかを決定する事をば美を樂むの情に任せず、翻て冷靜なる道理心に訴ふるの習性を馴致せむことを要す。

是の如き習性を馴致する方法如何。曰く學ぶの一事あるのみ。人は必ずしも現在の世間のみ拘泥すべきに非ず、唯改善と云ひ改革と云ふ、其然るべからざる所以の理を決すものは、飽迄實世間に對する歴史の並に包有的批評に基かざるべからず。

予は以上の言を以て今の空想的論客及び經世家の座右に呈せむと欲するなり (三十二年三月稿)

カーライル氏の英雄論の翻譯に就

きて

新體詩人を以て聞えたる土井晚翠が筆に成れるカーライル氏が英雄論は、是を春陽堂より公にせられぬ。吾等先づ英文學の寶庫を飾れるの一明珠を邦文にもしたる勞に對ひて、深く譯者に謝する所無かるべからず。

カーライル氏の故郷なる英吉利國には、かつて氏の存在を徳としたる時代ありき、晚翠は我邦の今の時をも是の如き時代なりと思惟したらむが如し。彼れ是の譯書に序して曰へらく、

舊信仰既に廢れて新信仰未だ興らず、靈界嚮導の光暗中に没して民心其の憑依するところを知らずとせば、トーマス、カーライルの言豈に一考の價無しと曰はむや。嗚呼東海の君子國、長時

の懶賊を破り、世界の大道に立ちて、三十年間物質的文明の利害已に斯の如し。泰西近世史跡に照して本邦の現狀を顧みば、本書の譯述未だ必ずしも徒勞ならざるを知らむ。

言ふところは、日本はこの三十年の間物質的文明を重じたるが爲に、靈界の信仰を失ひて民心歸する所を知らず、こはまさしくカーライル氏が神祕説に聽くべき時なりと謂ふにあり。果して然らば、國民の憂を以て憂とせる晚翠が志は、吾等の諒とすべき所なるべし。去りながら、吾等茲に聊か言ふべき事のあり。

有體に言へば、吾れは嘗てカーライル氏が最も熱心なる愛讀者の一人なりき、かつて氏が『サーター、リザルタス』とこの英雄論とが吾几上に二つなき友なりし一時ありき。否吾等は、英語を解せる我が青年學生の多くが、是事に關して、吾等と經歷を同うしたるを疑はざるなり。想ふに、其生涯の或時期に於て、バイロンを愛し、エルテルを好みたるが如く、



誰れか一度ひはカーライルを喜はざるあらむや。そは彼れに於て青年壯士に喜ばるべき謂はれあればなり。

彼れの是世と是人とを見るや、一切の實在を無視して記號となし、虚無となせり。彼れは人に於て肉を見ずして靈を見、世に於て盛衰を見ずして天啓を見る。彼れは其耳と其目と其理性とを信せず、聽くべからざるもの、見るべからざるもの、解すべからざるものを眞理として仰ぎたり。一切智は彼れに於て爲す所無し、彼の依りたのむ所は一の感情のみ。恍惚ム微、不言不知のエクスターゼのみ。宇宙は是れ神の記號、彼の神秘説の綱領唯是の一語のみ。彼れ獨乙の哲學を學びたりき、されど其の觀念論はますます彼の神秘説を神秘ならしめしのみ。一切知識の門戸を鎖ざして偏へに靈界の見るべからざるに憧る、何物の力か能く彼を如何すべき。やがて彼は昂然として一世を瞰下し、己れに同じからざるものを目

して凡て虚偽と呼はりぬ。かくて獨乙哲學か其故郷にシエライエルマヘルとスエーデンボルグとを養ひし間に、英吉利國は茲に極めて狂熱に富める一個の清教徒を現じぬ——

斯く書し來れば、吾等にカーライルを貶するの意あるが如し、されど暫く吾等をして其公しきを遂げしめよ。

神秘家にして清教徒たりしカーライルが、人を罵り、世を慨きける聲の如何ばかり壯快なりしかは、吾等が茲に述ぶるまでも無かるべし。げに彼がおもては、彼の崇拜者の言ひけむが如く、輝きを以て黒みたり、其眼は鼻の如く物の暗きを透し其口は其の暗き處に光ありと叫びぬ。曰く理想、曰く無限、曰く靈光、曰く天啓、曰く不可知、曰く不可見、彼れは凡知には測りがたき幾多の文字を列ねて、宇宙を記號とせる其の所謂神なるものを表はさむと煩悶せり、彼に於て暗中の摸捉に等しきものを、

世。人。は。驚。き。の。眼。を。擧。げ。て。其。處。に。百。千。の。意。義。あ。り。と。な。し。ぬ。世。は。罵。ら。れ。な。が。ら。彼。の。聲。を。義。し。と。聞。き。彼。の。知。を。深。し。と。稱。へ。ぬ。設。令。ひ。狂。へ。り。と。も。火。は。以。て。燒。く。に。足。る。彼。れ。は。其。烈。々。た。る。情。火。を。以。て。天。真。の。赤。誠。を。鼓。舞。し。暗。啞。叱。咤。そ。の。斷。續。の。聲。を。放。ち。て。一。世。に。呼。號。し。ぬ。世。は。遂。に。其。響。を。反。へ。し。ぬ。か。く。て。神。秘。家。た。り。清。教。徒。た。る。ト。ー。マ。ス。カ。ー。ラ。イ。ル。の。名。は。青。史。に。鏤。刻。せ。ら。れ。て。永。く。英。吉。利。文。學。の。寶。庫。を。飾。り。ぬ。

是。の。如。き。は。吾。等。の。眼。に。映。ず。る。カ。ー。ラ。イ。ル。な。り。げ。に。當。時。の。英。吉。利。は。彼。の。如。き。人。物。の。感。化。に。よ。り。て。其。の。文。明。の。進。路。に。一。段。の。反。省。を。加。へ。た。る。な。る。べ。し。さ。ら。ば。彼。の。聲。を。き。て。其。響。を。反。へ。し。た。る。國。民。は。賢。し。と。謂。ふ。べ。き。な。り。さ。れ。と。菴。英。は。常。食。と。す。べ。か。ら。ず。特。殊。の。人。は。其。用。や。特。殊。の。時。代。に。待。つ。あ。る。を。知。ら。ざ。る。べ。か。ら。ず。ト。ー。マ。ス。カ。ー。ラ。イ。ル。げ。に。彼。は。一。個。の。人。物。な。る。べ。し。さ。れ。と。そ。の。人。物。た。る。所。以。は。そ。も。何。處。に。あ。る。吾。等。常。に

人のカールライルを談ずるを聞きて、心潜に疑ふ所あり。

彼。れ。を。以。て。哲。學。者。と。せ。む。は。こ。よ。な。き。誤。り。な。る。べ。し。自。國。の。經。驗。派。の。哲。學。に。滿。た。ざ。る。所。あ。り。て。そ。を。僞。學。と。嘲。罵。し。た。る。は。言。ふ。ま。で。も。無。く。彼。れ。が。個。人。と。し。て。の。偏。見。に。本。く。彼。れ。が。そ。の。神。秘。哲。學。の。料。に。と。て。持。ち。來。れ。る。獨。乙。の。觀。念。論。の。如。何。ば。か。り。淺。は。か。な。る。よ。誰。れ。か。『。サ。ー。タ。ー。、。リ。ザ。ル。タ。ス。』。の。時。空。論。を。一。哲。學。者。が。眞。面。目。の。意。見。と。し。て。聞。か。む。こ。と。を。思。は。む。や。所。詮。彼。れ。の。世。界。觀。は。極。め。て。單。純。な。る。詩。人。的。神。秘。說。の。み。

是。幼。稚。な。る。神。秘。說。は。即。ち。彼。が。宗。教。に。し。て。又。彼。が。社。會。人。生。に。對。す。る。規。準。な。り。而。し。て。彼。れ。の。是。を。率。る。や。そ。の。天。よ。り。眞。け。た。る。一。種。の。厭。世。的。性。癖。を。以。て。し。た。り。しか。ば。其。人。生。觀。な。る。も。の。は。極。め。て。偏。頗。な。る。も。の。な。り。き。され。ば。彼。れ。は。マ。コ。ー。レ。ー。卿。の。如。き。穩。健。摯。實。の。人。を。出。し。得。べ。き。『。ア。ン。グ。ロ。、。サ。ク。ソ。ン。』。の。常。識。を。ば。す。べ。て。虚。偽。と。し。て。斥。け。た。り。き。

依て以て經驗派の哲學を罵りたる彼れが迷信は、今日果して如何ばかりの價值ありや。神秘説は知識無きもの、若くは知識を得るに堪えざるもの、其愚昧を掩はむ爲のこよなき甲冑なり。若し人そを意識せずと云はゞ、やがて是れ迷信のみ。そを高しとして稱ふる謂はれやある、神を云ひ、靈光を云ひ、天啓を言ひて、一切智を非拒する詩人的神秘説ほど、世に稚氣ある者は無し、そを空想の詩として樂むは則ち可、以て人生世界の規準となさむは殆ど小兒の事に類せずや。今のカーライル崇拜者と雖どもよもや是點を回護するほど没理的ならざるべし。

世を憤る者の言として彼の聲を聞かむ乎、吾等はその眞摯なる熱情に動かさるゝを禁ずる能はず。げに幾百千萬の生靈を載せて是限りなき歴史の過程を歩みゆく大なる人生に、一カーライル無しとせば、そは餘りに單調に、餘りに均整に、又餘りに活氣に乏しき人生に非るべきか。吾

等。に。代。り。て。是。の。限。り。な。き。希。望。を。ば。絶。對。の。威。力。と。し。て。讚。美。す。る。も。の。は、吾。等。何。時。に。て。も。是。を。歡。迎。す。べ。し。是。れ。や。が。て。世。に。詩。人。な。る。も。の。存。在。を。須。要。と。す。る。所。以。に。あ。ら。ず。や。されど是を以て直に人生の經綸に擬するものあらば、誰れか其稗氣を笑はざるべき。吾等は詩人としてのカーライルを認むれども、未だ經世家としてのカーライルを知る能はず。

彼を一個の歴史家として見むは亦是れ彼を知る所以に非るべし。英雄論一卷。是れ畢竟無韻の詩篇のみ。人文の歴史は偉人の傳記にあらず、謂ふ所の六種の英雄を以て世界史の神髓となす如きは、放誕の極みのみ。されば、彼れの英雄論は史傳にあらずして、實は名を偉人に藉りて自己の懷抱を暢べたるに過ぎず。彼れが所謂英雄を重じ過ぎたるは、殆ど吾等が史料の表に出づ。想ふに彼れは史を以て詩となせるもの、ヘルデル、シユレーゲル等が發達論的の獨逸史學が、彼れが神秘哲學と抱合して、

如何に英雄論の一篇を成し、やは、甚だ想像し難からざるなり。畢竟彼れは是方面に於ても一個の詩人のみ。

さればカーライルは哲學者にあらず、經世家にあらず、又歴史家にもあらずして、一個の詩人のみ。詩人たる彼れの本領の認められざるは、彼れにとりて最も大なる不幸なるべし。若し哲學者として見むか、彼れは猶ほ小兒の如きなり。其言ふ所條理なく、證驗なく、靦然たる一種の譎語のみ、愚かなるもの、迷信あるもの、狂癖あるもの、は彼を高しと謂はむ。されど冷淡なる眞理の思索者を如何すべき。若し經世家として見むか、空想暴論に於て誰れか彼の右に出づるものぞ。彼れ素より時勢に激して起てるなるべし、されど彼れは毫も時勢を救ふの方法を知らざりき。彼れも多少の警醒を世に與ふるを得たりとすれば、そは彼れが詩人としての勢力のみ。もしそれ歴史家としては、彼は疑もなく最も無學

なる一人なり。彼れの英雄論は言ふまでも無く、佛蘭西革命論のや、見るべき者を以てするも、所詮は一篇の變態叙事詩に過ぎず、見來れば彼れに於て取るべきは詩人としてのカーライルのみ。

げにテニズン、シエレが詩人たるの意味に於て、カーライルは詩人に非ざりき。されど平仄なく、韻律無きことを外にしては、彼の文字は概ね是れ詩篇のみ。こはカーライルを知るもの、夙に首肯せる所なるべし。人或は彼を批評家と云ふ、されど彼れがものしたるゲーテ、若しくはバルンスの評傳を讀みて、そを詩ならずと謂ふ程のものあらば、其人の批評家と謂ふ所の言、亦多く典とするに足らざるべし。既に詩人として彼を見れば、哲學者、經世家、歴史家としての彼に於て累ひとされるもの、すべて其特殊の價値を復活して、茲にトーマス、カーライルてか一大詩人を體現し來る。何となれば迷信も、淺薄も、穉氣も、其他のすべ

ての欠點も一度詩界の雲霧を隔つれば、更に却て一段の光彩を添え來るべければなり。而して彼れが天真の赤誠は、其暗啞の音、斷續の聲に一道の靈氣を與へ、聽くものをして覺えず感奮興起せしむ。げに彼の眼には涙あり、彼の胸には熱血あり、彼の唇には火炎あり、言美ならず、語麗ならずと雖ども、沸々直に人の肺腑に迫る。其迷信と、淺薄と、穉氣と、却て其情を激し其意を強うするに足る。實に彼れは期せずして人を魅するの力ありと謂ふべし。

吾等は茲にカーライルの評論を旨とする者にあらず。唯哲學者、經世家、歴史家として彼を論ふもの、甚だ當らざるを言ひたるのみ。世に往々小カーライルを以て自ら居るものあり。其の眞摯と狂熱とは吾等はを諒す、されど其幼稚なる神秘論を移して現世の經綸策に擬せむとするに到りては、遂に其の可なるを知らざる也。あはれ詩人にして經世家の假

面を被れるもの、必ず世を毒し人を誤らむ、彼れ若し自ら假面を被れることを覺らざらむには、人は是を外より褫落せざるべからず。

終りに英雄論の譯者に問はむ、彼れ亦カーライルを見るに經世家を以てしたるにはあらざる乎。晚翠曰く、物質的文明の弊に堪えざる今の日本は須らくカーライルに學ぶ所あれど。あ、彼に學ぶは何よりも易きこと也、現に神秘論は無學なる宗教徒慷慨家の得意とする所にあらずや。されど學び得たる所、是を何事に施すべしとするか。遮莫、吾等は何れの世に於ても迷信を獎勵する經綸策の利益を認むる能はず。もし彼れ學びて益あるものならば、そは彼が詩人としての狂熱と赤誠とのみ。

さはれ、英雄論の翻譯は吾等の甚だ喜ぶ所なり。されど譯者の意、今の世にカーライルの經世論を勸むるにありとせば、吾等潜にそが人の子を誤ることあらむを恐る、敢て一言す。(三十一年六月稿)

## 己に忠なれ

批評家は強て放言の題を求むべからざるが如く、著作家は強て感興の筈を探るべからず。要は人情自然の流露を尙ふにあり。

真正の著作は自己の發現なり。己れ中心是を感せずして、而して感じたるが如く装ふは、是れ即ち偽善者の心なり。夫れ人情は虚偽に動かす偽善者の心を以て安ぞ人を動かし世を化するを得べき。

是を以て一切作家は筆を執るに當りて、先づ己に忠ならざるべからず。己に忠なるは即ち人に忠なる所以なるを覺らざるべからず、所謂藝術的良心なるもの即ち是也。借問す今の作家は果して己に忠なりや。

批評家の言に風靡して昨東今西するは己に忠なるもの、所爲に非ざるなり。世社會小説を呼べは乃ち食を哺して而して是に赴き、滑稽小説を

呼べば杯を投じて是に走るは、是れ己に忠なるもの、所爲に非ざるなり。人自ら知らず、他人の顰笑を窺うて其云爲を左右するもの、是ち即れ己を没する者なり。是の如きは畢竟一種の社會的幫間のみ。是輩に向て大文學を要む、乞兒に向て萬金を求むるに等し。

遮莫吾れは今の批評家に憐焉たらざるものなり。彼等の多くは偶々西洋の美學を繙き、卷中記する所の文藝の品彙題案を見、彼にありて我れに無きもの、直に呼で我文壇の欠陥となし、短所となす、是に於てか古來我文學嗜好の關知せざりし幾多の新題目は提供せられ、作家をして是を充實せしめむと要す。彼等の言論によりて是を察すれば。美學所載の一切品彙を羅致せずむば己まざらむとす。吾れを以て是を見れば是の如きは國民文學の發達を企畫する所以に非る也。

世に文學なし、唯國民文學あるのみ、是れ猶ほ世に人類無し、唯國民

あるが如き也。人類普通の性情は素より當に人類普通の文學を有すべし  
 而れども是れはた獨り國民文學の發達に伴ひ得べきのみ。國民性情を蔑  
 視して而して漠然文學の隆興を計るは、山に向て矢を放つが如けむ。今  
 の批評家か作家に望む所、果して先づ是國民性情に照して其適切を認め  
 たるか、唯彼にありて我に無きの故を以て我亦是を有せざるべからずと  
 せしには非るか。嗚呼作家が已に忠なるべきが如く、今の批評家は口を開  
 くに當りて先國民性情を三思せざるべからざるに非ずや（三十一年一月稿）

### 國 民 歌

國民歌を撰べ、是れ民心統一に不可欠也。一定の國體あり、一定の國民  
 道德あり、而して一定の國民歌無し。大典丕儀に際して國民の謳歌せむ  
 とするも、其れ何によらむとするか。

君が代の歌、洋々太平の象あり。尙は沈靜幽寂の格調あるを恨みとす。  
 未だ生々の進取的、尙武的なる大和民族の心血を鼓舞するに足らざるな  
 り。吾人は國民的大抱負と國家的大理想とを發揚せる更に雄大更に壯烈  
 なる國民歌を要す。

歌人よ、樂家よ、眼を擧げて是一大事業の卿等の頭上に懸れるを見よ

### 我邦人の紀行文

情は信ならむを欲し、詞は巧ならむを欲す。孔丘氏の是言や、取て以  
 て文章家が座右の箴と爲すべし。甚しい哉、我邦人行を紀し景を叙する  
 の文に、鋪張浮誇の文字多きや。

若し事を假りて辭令の工を誇らむと欲する乎、則ち可。苟も文に縁りて  
 景物の眞を傳へむと欲する乎、吾人遂に我邦の所謂紀行文なるものを贊

する能はず。是を今の多くの文章家の輩に見るに、彼等の行を紀し、景を叙するや、意を用ふるは一に文字の上にあるが如し。時に景物の實、其文藻を揮灑するに適せざらむ乎、則ち強て境を造り故らに事を構へ塗飾百般、成し來る所、概ね架空浮漫の事のみ。是の如くにして想の奇にして語の麗はしきもの、將た何爲るものぞ、

夫の標榜して其々の山、其々の川の記と稱するものに、古より是類多し。是れ支那文人が空文の弊を襲きたるものにして、學者記實の筆としでは、聊か虚誕の譏を免れざるに似たらざるや、文の實用は、道を載し事を記するにあり。詩歌小説の空想に終始するもの、時に狂言綺語に縁りて、吾幽妙の情思を暢ぶるを要すと雖ども、苟も事の據るべく道の準るべきものある、豈猥に作者の補綴を容るべけむや。我邦の文章家が紀事叙景の文字は、事を假りて辭令の工を誇らむと欲するにある乎、又は文

に縁りて景物の眞を傳へむとするにある乎、其意若し後者に在らば、其文字の浮夸、是の如くなるべからざる也。吾人は其詞の巧なるを非とせず、唯其情の信ならざるを咎むる也。

吾人の我邦人の紀行文に慊焉たらざるや、久し。而して今茲に吾人をして是言をなさしむるに到りたるは、遅塚麗水が近著日本名勝記の力、與て多きに居る。麗水の叙景紀行の文藻に富める、吾人の夙に知る所なり。其想や太だ奇、其言や太だ麗、一石一木と雖ども、彼が筆に上れば必ず多少の雅趣を帯び來る。山は翠薇に非ざれば則ち瑰琦。水は清冽に非ざれば則ち縹綠、曰く松翠瀾紫、曰く暮雲晴雪。凡そ自然の景物、詩中の料に非ざるは無し。其の某の山を記し、某の川を叙するや、曲折委迤、筆華四もに飛びて、奇趣横溢、讀む者應接に遑あらざらむとす。文の工を以て之を見れば、或は其到れるものに庶幾からむ。然れども景を叙



して其の眞を傳ふるの文字としては、則ち大に未だし。

彼れの筆は如何なる惡山水をも美化せずむば止まざるなり。若し彼の紀行文に依傍して、探勝の途に上るものあらば必ずや其鋪張架空の甚しきに一驚を喫するならむ。畢竟彼は小説を綴ると一般の用意を以て其紀行の筆を執れるもの、求むる所は文の工なるにあり、事の眞を顧みるの違あらざる也。記實を以て第一義とすべき名勝記の如きものを著はすに、既に是心を以てす。吾人の取らざる所以なり。

吾人を以て是を見れば、凡そ形式に拘泥せる支那文學中、其弊竇尤も甚しきを叙景文となす。道元子厚以後、四朝の文字、山水を寫すもの、形容名狀、殆ど一定の格式あり、一定の辭令あり、其境と事との如何に拘らず、其の峰巒を寫し、河海を寫し、巖洞水泉、風雲月露を寫すもの、千篇一律、畢竟遊戯文字のみ、古來我邦の文章家、亦是積弊に浸潤し、

想、奇語麗を以て、猥に事境の眞を没し去る、是を以て其の文愈々巧にして、其實愈傳らず。吾人を以て見れば是れ一恨事也。

麗水の文、工は則ち工、唯啻り事の眞を没し去るのみならず、彫琢腐爛に過ぎて、往々無意義の文字を作爲するに到ては、更に太だ惜むべし。

煙波を隔て、豆相の山妹の髻となり、楸の眉となり、海は則ち寶鏡、夕陽波に入るの時、激瀾として燕脂となり、初月雲を出づるところ、光依稀として豎櫛となる、雲を傳し、霞を點じ、明星の檣花簪、紫嵐の輕羅裳日夕來り涵して容つくるの明鏡となる、

の如きは、讀み去りて何等の印象を止めず、漢學者流、或は其比興の工を賞せむも、吾人を以て見れば、輕浮寧ろ厭ふべし。

岩に肉なし、潮に骨あり、潮怒りて岩怖れ、岩上の古松巖然として森立す、碧泉沸々岩罅より流る、石觀音を安ず、風霜の打つところ、蛟龍の洗ふところ、鬚髯として眉目を見るのみ、垂絲櫻二つあり、花時に至れば、珠簾聲をく半天より垂る、

松壁高く、瀾語紫に、逍遙の人をして歸るを忘れしむ、石貌語無く、閑雲儘に、徂來す、亦た一幽境、兩岸は皆陰樹、風吹き渡る毎に、驚翠愕緑、潭水微に笑て、倒瀾の影を皺ます、寂寞として碧落を浸し、倒瀾の岡、浮游の閑雲、洗洋として一色の淪漪となる。若し夫れ夜闌けて天地寥廓首を擧ぐれば星斗盃よりも大なり。

雲際の雙鬟、且には藍を挽き、夕には紫を凝し、靄然として遠くより親しみ、之をして覺せず、長指せしむるもの、是れ墨水坡上に見る所の筑波山なり。

是種の造語は、麗水が文中殆ど送迎に違あらず。一見甚だ其文致を美にするが如しと雖も、退て考ふれば、多くは是れ常套腐爛の文字、實境を眼前に活如たらしむるに些の功力無し、堆朶裝飾を是れ事とし、零星補湊、前後相貫注せず、讀むもの寧ろ其煩はしきに堪えざらむとす。麗水たるもの少しく顧みる所あるべきなり。

蓋し能文の士は、醞釀蓄積、沈浸之を久しうして、輕々しく發せず、事實の眞に之を要するに臨めば、大小深淺、各々類を以て相觸る、是に於てか所謂糞土の用、時ありて金玉と功を同じうす。蓋し作文の秘訣なり。夫の徒に辭令を紈綺にして、其美に誇るものは、兒戯に等しき哉、吾人偶々麗水を以て言を爲せりと雖も、又以て我邦文章家先生の一顧を要むるに足らむ乎。空文虚辭の弊や、事を愆り、眞を誤る、古より然り。今は則ち是弊竇を一新するの秋に非ずや。(三十一年八月稿)

### 朦朧派の詩人に與ふ

新體詩家は所詮今日の態度を一變せざるべからず、吾人は新體詩家諸君が吾人の言を聽くに當りて先づは一命題を是認せむことを要む。

本邦言語の性質として字母の時間に變化無きこと、一言語を構成する字母の數量の種類に乏しきこと、隨て音律の制限は主として人身生理上のリュトムスに依りて規定せらるゝと、是の如くにして感情思想は一種

の外的形式に籍束せられて、其自由の暢發を遂げ得ざること、是等の事情は我詩歌の進歩を沮遏する所の最も有力なる原因なるべきこと吾人之を認む。然れども新體詩昨今の窘塞を致したる上に於て直接の原因を成せるものは實に新體詩家其人なりと言はざるべからず。是れ新體詩家を外にして、天下眼あるもの、明に認識する所なり。

吾人は所謂叙事詩、若くは叙事詩的抒情詩が今日の詩形に縁りて成功し得られざるべき必然の理由あるを認む。されど純抒情詩若しくは冥想<sup>イマジネーション</sup>的抒情詩のすべても亦必ず朦朧體に終るべき者なるか。彼等朦朧派の詩人は古語の復活を以て自己の天職を爲し、措辭列句つとめて古に擬す。古語と擬古と必ずしも不可ならず、而かも故らに意の透徹を避けて、隔靴搔痒の弊を忍び、故らに語の洒脱を與みて施泥帶水を顧みず、心機の妙應を尙はずして、偏に刀鋸に縁りて功を成さむと擬す、是を以て其情や散

其詞や漫やいもすれば雕績滿目、紛として近くべからず、あはれ神越心遊の姿なく、蟬脫軒擧の風無し、是れ豈所謂旁門小法に眩して金剛眼睛を着くることを遺れたるものに非ずや。

然れども疾行は善迹無し、吾人豈暴露叫噪を尙む者ならむや。輪匠の超悟は素他人の付度を容れずと雖も、唯古より大詩人の作爲する所、斯の如きものに非るを思ふ。ガイベルが Der Mai ist gekommen. を見よ、

ウーランドが Das Schloss am Meer を見よ、もしくはハイ子<sup>ハイツ</sup>が Lorelei、ルニツケルトが Liebesfrühling を見よ。意は透徹にして餘情依々、語は明晰にして遺韻究まり無し。之れ精靈の呼吸を以て直に人の肺腑に迫るもの、抒情詩は遂に是の如くならざるべからず。

そもや情のものたる去來端倪すべからず、電光一閃妙機すなはち逸す。抒情詩は其最高の調趣を捉へて、人の心火に點するもの、之が詩人たら

むものは、何の違ありてか事をひきて傳會し、物によりて曲引せむ、況むや何の違ありてか刀鋸の功を誇りて骨董趁貼を樂むべきぞ。

若し夫れ冥想的抒情詩にいたりては、沈靜なる情路をたどりて其微韻を尋ぬるもの、氣必ずしも昂らず、意必ずしも徹せず、或は悠揚、或は

沈鬱、知情相交貫し、情意相纏綿し、開閉窮通、其おもむき一ならず。ゲーテ、シエレー、キーツ、もしくはシルレルの諸作に艱深難解のもの

ある、誰か又之を尤むべき、されども之れ朦朧に非ざるなり。キーツが『エ

ンヂミオン』を見よ、シエレーが告天子歌、もしくはシルレルが『理想と人生』を見よ、情緊切、意明晰、之を誦すれば詩人の氣息鏗々として衣襟

の間に鳴る、吾人は冥想的抒情詩の實に斯くあるべき者なるを信ず。何事ぞ今の我新體詩家は、理路に涉れば補綴を事とし、辭章を鍊れば言

解せずして而して失戀を歌ひ、無常を感せずして而して厭世を叫ぶものに非ずや。徒らに理によりて情を驅らむとするは已に之れ偽善者の心なり。吾人故に曰ひけらく、今の新體詩家にして誠に人を動かさむと欲せば、先づ其偽善者の心を去らざるべからずと。

あはれ今の新體詩家は吾人の言を何と聞くべきか、夫の弊帯を懷て千金に過ぎたりとなすものは、法言懿則を以て徒に罵詈となさむ。吾人は他の吾人を誤解するものを尤めず、只彼等が憤激一番して今日の態度を轉せむことを切望す。

無 題

今の小説の一弊は冗漫にあり。精察を衒ひて無益の文字を列ね、概ね

簡括嚴核の用意に乏し。美文の結構は當に巧妙なる煉瓦壁の如くなるべし。一片一角も増進すべからざるを期すべきなり。

久屈の中に信びて至足の後に用ひ、既溢の餘に流れて持滿の末に發す、學者説を爲すの道當に是の如くなるべきなり。吾人年少學尙ほ淺し、未だ是境地に達せざるを慚ぶ、願ふに世上吾人と感を同うするもの尠からざらむ。希くは俱に共に一向精進して敢て懈らざらむ。所謂游刃餘地斤を運して風を成す。是の如くにして初めて能くせむのみ。

ワルト、ホイットマンを論ず

偽りの世なるかな。皮一重この髑髏を包めども、猶ほさすがに人の形に露はる。されど梟の暗きに集ふが如く。形無きもの今や偽りの巢となりぬ。

人の言ふなる美はしき心とは、自ら欺ける心にあらずや、詩人の唱ふ美はしき歌とは、かゝる偽りの心に阿ねる歌にあらずや。されば其の搔いならず琴には偽りの響あり。

今や肉を求むるに忙はしき靈は、却て肉を卑しきものと言ひなせり。暗きを求むる人は、却て光の眩ゆきに強いて笑を含みぬ。餓たるものは食を見て顔を背け、人は其の路に仆るゝを義しと稱ふ。

自由、平等、博愛、あはれ新文明の旗章のいかに美しきよ。されど自由とは自ら欺ける人の晝笑ひて夜泣くの謂なるか。平等とは生けるものを稱へ、死せるものを譏るの謂なるか。博愛とは雨の如くたゞしき自然の力を私し、却てその爲に困める者をしもべとして養ふの謂なるか。

誰れか人の知識を進みたりと謂ふ、進みたりと云ふはまさしく偽りの知識にあらずや。人は肉の外に靈ありと謂ふ、されどその靈は却て肉の

しもべたるにあらずや。人は物の始めと終りとを説く、是れ彼等が所謂知識なるものなり、されど過ぎたるを來るべきことを知りて、却て今のうつゝを知らざらむには、是れやがてや粟を倉につみて却て餓に死するものにあらずや。彼等は形なきもの、美を知れども、形あるもの、更に美なるを思はず。自然の懷に育てられたる彼等は、今や將に其母を忘れしとす。世を擧げて人は知識の爲に傷けられ、却てそを義の爲に仆れたる人の血潮に較べむとす。あはれ彼等如何なれば恨み悲み嘆きつゝも、尙ほかつかの知識なるものを貴ばむとはするぞ。  
げに世を擧て人は覆面の中に呼吸せり、あはれ、彼等如何なれば其本來の面目を秘密として掩ひ隠さざる可らざるか。將た掩ひ隠さむと欲するか、彼等は怒るべき所に喜び、悲むべき所に笑ひ、苦むべき所に樂むをもて、自ら其行ひの高きを誇る。自然の要求を蔑視して、人性の自由を弄ぶは

果して爾かく貴むべき事なるか。血と肉とを包める人に對ひて其表皮を  
取り去る者は、則ち人道の名によりて迫害せらる。されど所謂人の道とは  
有るものを無しと云ひ、黒きものを白しと云ふの謂なるか。さらば是れ偽  
りの道に非ずや。等しきものは等しきもの、母なり。偽りの中に何處に貴  
むべき人の道ありや。眞理は裸かにも眞理たるべし。さるにても覆面  
の中に呼吸する人は是大自然の活ける眞理を如何に見るらむや。  
げに大自然の眞理の如何に大いなるよ、憐れむべき人々の装ひ、飾り  
欺き、偽りつゝある間に、一切を押し包める大自然の眞理は、其一分の  
歩趨を枉げざるなり。生くべき所には生あり、死すべき所には死あり。  
水は流れ、山は峙ち、空は長へに碧し。春來れば花咲き、秋來れば霜降  
り、日は常に東西し、月は永く盈虧す。装ひ、飾り、欺き、偽れる人は  
たこの大なる眞理を如何にすべきか。愚かなる彼等はすべての物、人の

如く詐はり易からざるを知るに及び是世を憂きものと思ひなしても。尙ほその偽りを捨てむとはせざるなり。

偽りの世なるかな、偽りの人なるかな。形に拘はりて其物を斥け、名に泥みて其實を棄て、末に走りて其本を遺る。顧みて人に問へば是れ即ち文明なりと。

ワルト、ホイットマンこそ是の偽りの世と、偽りの人ど、是の似而非文明とに反抗して、社會人生の眞面目を發揮したる北米現代の詩人なれ。ワルト、ホイットマンは徹頭徹尾人生の詩人なり、實在せる人生の詩人なり、自然の要求を重じたる詩人なり、平民の詩人なり、凡ての形式主義に逆ひて人間の大きなを唱ひたる詩人なり。凡ての人を包める覆面を褫ぎ取りて、其秘密をば眞理として暴露したる詩人なり、終りに彼は一個の亞米利加人として其國民性を最も明晰に、最も忠實に唱へたる

詩人なり。——あゝ斯く言はゞ吾れホイットマンを褒め過ぎたるか。

實在せる人生は彼が詩の命なり、彼が詩の到る所に表はれたる勢力は一として其根據を實在の中に有せざるは無し。されば實在の觀念に乏しき人にとりて、彼の詩は餘りに強きに過ぐるなり。所謂詩的と稱せらるゝあだなる想像は彼に於て爲す所無し、彼れの聲は生ける人の聲、彼れの心は活ける人の心、彼の描き刻める人は繪畫にあらず、塑像にあらずして、活ける人體なり。されば書によりて世を觀じ、學校の窓より人生を眺めたる人は、彼れの詩を解するを得じ、彼れの訴ふる所は汗と血と涙と誠とを以て實在の人生を釋き得たる人にあり。

No shutter'd room or school can commune with me.

But roughs and little children better than they.

The young mechanic is closest to me, he knows me well.

The woodman that takes his axe and jug with him shall take me with him all day.

實在の人生は決して自然に離れ得べきものにあらず、是れホイットマンが人生に關して有せる根本の思想なり。げに文明とは自然の制御の謂なるべし、されど然るが故に自然を輕蔑し、其要求を卑むべき理は何處にある。肉の外に靈なく靈の外に肉無し。吾等が身體の健やかに、鮮やかに、美はしく、全からむことは、最も貴むべき自然の要求にはあらざるか。誰れか肉の樂しみを靈のそれよりも貴からずと謂ふか、世は食の旨きを求むるを卑しとなす、今や男女の愛情だに是を『詩的』にせざれば認めて美はしとせられず、所謂文明は將に凡べての肉慾を亡ぼし盡さずむば已まざらむとす。吾れ却て『人道』の名によりて是暴行を非認せむ、かくてホイットマンは唱ふて曰く、  
生を汚すは死を汚すと等しく惡しきに非るか、

肉體は精神の如く大切なるものに非るか、  
若し肉體にして精神ならずとせば精神とは何物かや、

(アダムの子等全集八一頁)

吾れもし我愛せるものと共にあらば吾が望み達せり、  
彼等の間に歩みて其體に觸れ、暫しは其頸の廻りに軽く吾腕を纏ふ——斯くしたりとて何事かあらむ、

吾れは是上に望むべき樂無し、其時吾れはさながら水に泳げるが如し、  
凡べての物能く心を喜ばず、されど是の如く心を喜ばしむるもの無し、

(全、全集八三頁)

爾等は會て女の肉體を愛せしことありや、  
爾等は會て男の肉體を愛せしことありや、  
爾等見ずや、是の如きは世界の凡ての時々處々の凡ての人にありて正に均しきことを。

(健全なる身體の各部を列擧し)

オ、吾れ敢て言はむ、是等は肉體の詩の一部なるのみならず、亦精神の詩の一部なりと、



オ、吾れ又敢て言はむ是等は精神なりと

(全、全集八五頁)

是の如き肉體の讚美は、『アダムの子等』全篇を通じて到る所に表はる。吾等は牧童樵夫を以て特に人生を表示するに足るものなるかを疑ふと同じく、肉體の精神に比して特に貴むべきものなりやを知らず、されど今の時と世に於て是の野に呼べる人の聲を聞く、誰れか清廉なるホイットマンをして是に至らしめたる夫の所謂文明なるもの、欠陥を認めざるものぞ。

されどホイットマンは、吾等を以て見れば徒に肉慾の快樂を重じたる淺薄なる詩人に非ず豫め人生世界に關りて良し臆るげながらも或偉大なる信念を蓄へ、是の偉大なる信念を以て現世に臨みたるとは、蓋し疑ふべからざるが如し。『アダムの子等』は人體を唱ひ生殖を唱ひたるのみならず、又一切物象に精靈あることを歌ひ、男も、女も、飲食も、呼吸も、

是精靈の圓滿なる發達に缺くべからざることを歌ひたり。

地球の天に隠れることの疑ふべからざる如く、地球上の凡ての物は精神的理想に向て走る。

.....  
區々たる差別は何爲するものぞ、——男にまれ、女にまれ、力あり、愛あり、又清きものは、凡て是宇宙の永遠不易なる秩序に於て常に人に益あり。

是永遠不易なる宇宙の秩序に於て、勝敗榮枯生死の多く喜憂するに足らざるを述べて曰く、

爾等は壯きもの、老いたるもの、如何になりゆくかを知れりや、爾等は又女子小兒の如何になりゆくかを知れりや。

彼等は何處にか生存す、而して幸ひなり。

夫の小なる芽だも世に死なるもの無きを證す。

凡ての物は前へくと進むべし、されど何物も減ひざるべし。

死とは人の思ふが如きものに非ず、更に遙に幸なるものなり。

(未來の詩人、全集三十四頁)

されどこの偉大なる哲學上の信念は、ホイットマンに於て重きを爲せるものにあらず。偽りの世を攪醒せむが爲に唱ひたる彼が詩は、常に實在の人生を遺れざるなり。良し宇宙を觀じて “vast similitude which interlocks all” となすも、良し人生を以て『永遠なる旅行』となすも、彼の心は常に個人てふことを離れず。『大道の詩』一篇に到り、是思想は澎湃として波の如く湧き立ちぬ、曰く萬物は個人の爲に存す、曰く、精神、自然、政府、財産の訓への後には常に必ず個人の訓あり。曰く、宇宙の凡ての學理は個人に集まる。

The whole theory of the Universe is directed to one single Individual, — namely, to You.

是に到りて北米合衆國民の個人主義は、其赤條々の姿態を以て明に表はれたりと謂ふべし。其思想雄健壯大、實に一世を吞吐するの概あり。世の肉慾を奨勵したるを以てホイットマンを貶るものは、うはべに浮べ

る塵芥の汚れたるを見て其下に沈洋たる大洋の水あるを知らざるものみ。

されど『アダムの子等』の或部分は、決して清淨なる詩と稱するを得ざるべし。『一婦人我を待つ』若くは『狂喜の一時』の如きは、猥褻として當然批難せらるべきものならむ。左に掲ぐる數行の如きは、我邦にて英語を讀み得べき程の教育ある讀者にのみ示めし得べきなり。

It is I, you woman, I make my way.

I do not hurt you any more than is necessary for you.

I pour the stuff to start sons and daughters fit for these States.

I press with slow rude muscles.

I brace myself effectually, I listen to no entreaties.

I dare not withdraw till I deposit what has so long accumulated with in me.—p. 89.—A woman waits for me.

然るにホイットマン自らは、是數行にして萬一省略せらるゝ如きことあらむには、寧ろ『マダムの子等』の一篇を擧げて是を抹殺すべしと慷慨せり。されど果して是れ氏が所謂 *heroic indistinct* として容認すべきものなりや否や（全集四三六頁参考）

さはれ氏の肉慾主義に就いて如何の批難あるにもせよ、吾等は氏をしてかゝる文字あらしめたる所以に就いては其志を諒とせずむはあらず。ホイットマン其詩集に跋して曰く、『十九世紀と北米合衆國と。是れ是詩集ある所以なり』と（全集四二七頁）。是大なる公憤と感激との更に鋭く表はれたるものは實に其平民主義の鼓吹にあり。『今や民主政治は有力なる人々の爲に妨げられて又當初の氣力無く、一切を擧げて死せる平面とならむとす』。死せる平面なる哉、死せる平面なる哉北米合衆國の民主政治は正に是一語の中に盡されたり。今の世に二大壓制國あり、東半球の魯西亞

と西半球の合衆國と是なり。唯其人民に臨むや彼は兵力を以てし、此は金力を以てす。専制と虐待とは則ち一のみ。彼の叫ぶ自由の聲によりて得る所の者幾何ぞ、文字と音響は遂に事實とならざるなり。富は權制を産み、權制は實益を收む、殘る所の名や即ち自由と平等のみ、されど形式主義の弊や、尙ほ是の空名によりて正義を説く、されば四海同胞の旗幟の下に國を樹てたるもの、子孫が、宗教の名によりて異人種迫害を行ひ、人道の名によりて『帝國』主義を實行しつゝある間に、彼等は尙ほ其自由と平等とに謳歌するをやめず。是れホイットマンの坐視するに忍びざる所なり。されば所謂富、所謂權力、所謂紳士は彼が詩中に認められず、人は其『人』たるの力と性とによりて初めて尙ばる。殊に物質的、方便的の文明に對しては最も痛切なる打撃を加へたり。曰く

爾等が永續すべしと思ふ所のは大なる都府か、

又は殷盛なる工業國か、又は完備せる憲法か、又は堅牢なる汽船か、又は花崗石と鐵とに造ら  
れたるホテルか、又は工業上の大工事か、城壘か、戦艦か。

已めよ。是等は其物自らの爲めに存在するものにあらず、其用を終れば用無きものとなり、や  
がて來るものは破壊のみ。

大なる都府とは大なる男又は女を有する所なり。

よしそは二三の茅屋より成れりとするも尙ほ全世界の最大都府たるを失はず、  
大なる都府は何處にありや、

奴隸なく又奴隸の主人なき處に、

平等が事實の上に於て證明せらるる處に、

最も友誼厚き朋友の住める町のある處に、

兩性の純潔なる町のある處に、

最も健全なる父の住める町のある處に、

最も體格善き母の住める町のある處に、

其處に大なる都府あり、

吾等詩を讀む時は、北米合衆國の文明が如何に深くホイットマンの胸  
裏に懸れりしかを想像するを禁する能はず。『十九世紀と合衆國と、而し  
て此詩集あり』と云ふ言の愈々旨味深きを覺ゆるなり。彼れは是の方便  
的文明と共に形式主義を排斥して曰く、

*Creeds and schols in abeyance,*

*Returning dack a while sufficed at what they are but never forgotten,*

*I harbour for good or bad, I permit to speak at every hazard,*

*Nature without check with original energy.*

*p. 39 Songs of Myself.*

ホイットマンは又今の學者と稱する輩の空理を談じ、空想に耽り、却て  
人生の目的を遺却するを笑ひ、且つ謂へらく、

營々として學に力む、是れ何爲るものか、學びたるものにも學ばざるものにも事實は事實なり。  
吾れは求むる所なし。——吾れは只視、踊り、歌ふ、笑ふ。

(吾身の歌、全集三十一頁)

冷嘲骨に徹す。更に人智の淺くして争ふに足らざるを諷して曰く、『一個の小兒あり、草花を手にして吾に問ふて曰ひけらく、草とは如何なるものぞ。あゝ、吾れ如何なる答を是小兒に爲し得しづ、吾れの是を知らざるは猶ほ是小兒の如きなり』(同上、又曰く、

吾れは人の始と終とに就て談するを聞けり、

されど吾は始と終とに就て談する者に非ず、(同三十六頁)

蓋し彼れ、夫の生ながら死せる世の學者に憤る所ありたるなり。一切事物は人の爲に存す、人物の爲に存するに非ず。人を幸ならしめむが爲の知識は、今や却て人を驅役し、勞死せしめずむは己まざらむとす。其知に於て一日の長あるものは、宇宙の無盡藏を仰かず、却て他を瞰下して愚なりと呼ぶ。是の如くにして起りたる争は、人生と何の爲す所や。十九世紀の文明は自殺の文明なり、己の爲に墓穴を掘りつゝあるの文明な

り、人は其末に走りて歸を忘れざれば己まず、世は偽りを養ひて自ら斃れざれば己まず、かつて健康の爲に砒石を食ひたるもの、今や其量の多きに堪えずして而も其然る所以を覺らず。ホイットマンは正に是時弊の救濟者を以て自ら任じたるなり。

げに大なる詩人は常に其時と其國との醫師なり。彼は吾等に生命を齎らせばなり。アルノルドが、詩は人生の批評なりと云ひけむも。恐らくは是意味に於てならむ。ワルト、ホイットマンが詩は、即ち十九世紀の批評なり、殊に合衆國文明に對して最も大膽に且根本的なる打撃と忠告とを加へたるものなり。其言直截にして簡明、簡明にして深遠、かの婉曲の『詩趣』に乏しと雖ども、一氣直に人の肺腑を衝くところ、さなから預言者の聲を聞くが如し。彼の聲は琴の音にあらずして太鼓の響なり、感情の響にあらずして意

志の聲なり、而かも最も健康に最も體力ある人の口より出つる意志の聲なり、彼は一度びも泣かず、悲まず、恨まず、常に笑ひ、樂み、踊る。彼は成すべき事業の多きを見て自ら慰む、過去を顧みて死兒の齡を數ふるに違あらざるなり。彼の訴る所は耳にあらず、目にあらず、人の肺肝なり、靈なるもの能く靈を知る、彼が技工の訣唯是のみ。ロングフェロ川の婉麗を好み、ラエルの雄渾を樂むもの、ホイットマンに遇ふて茫然として爲す所を知らず、往々罵りて詩に非すと謂ふ。げに平仄と韻脚とを以て詩となすもの、眼より見れば、是れ正しく詩に非ざるべし。然れども所謂詩なると詩に非るとは、幾何かホイットマンを輕重し得べしとするぞ。彼にとりては最も明白に、最も有効に、其預言者的思想を表はし得れば則ち足る。平仄と韻脚と彼に於て何爲るものぞ、彼は遊戯の爲に詩を弄ぶものにあらず、偽りの世と偽りの人との直さむが爲に其筆を執

りたるなり。彼は玩具を以て詩を遇するもの、爲に書かず、人生の最も嚴肅なる問題に對して煩悶するもの、爲に其解釋の光明を抛ちたるものなり、彼の眼には人生あるのみ。

來らむとする詩人よ、來らむとする演説家、歌謠者、音樂家よ。

今の時を吾を知る能はず、又何故に吾れあるかを答ふる能はず。されど爾、是迄知られたるものより更に廣く、更に健全に、更に大陸的なるものよ、

起てよ、何となれば吾を知るものは爾なればなり。

(來らむとする詩人、全集十八頁)

何にぞ其自ら信ずることの厚くして自ら居ることの高きや。吾等はホイットマンの讚美を事とする者にあらず、されど敢て天下の讀者に告げむ。今は是れ彼の知らるべき時にはあらざるか。何となれば、彼の知らるべき時はやがて偽りの世の終りを告ぐべき時なればなり。吾等豈詩歌を以て殊に言を爲さむや。(三十一年五月稿)

(附言) ワルト、ホイットマン(Walt Whitman)は北米の詩人にして數年前に死せり、其詩集を「草葉」と云ひ千八百九十二年フヒラデルフヒアなるダビッド、マツケー出版社より出版せり。

ホ イ ツ ト マ ン (再び)

我邦人が外山博士の新體詩を痛罵したる間に、亞米利加人はホイットマン氏を歓迎せり。今の我國文學者にして氏の詩篇を讀まば果して如何の感あるべきや。

詩歌は文字の音に非して靈魂の響なり。矯飾偽善の世に是赤條々の人生を歌ふものは誰ぞ、吾れは百千の偽詩人よりも、むしろ眞率なる一ホイットマンに行かむ。

偽詩人とは何ぞ、何ぞ

偽詩人とは何にぞ、詩才なくして詩人たらしむとするもの、是れ。

由來我邦には一種奇異なる風習あり、國學者とし云へば必ず同時に歌

人にして、漢學者とし云へば必ず同時に詩人たり。かく文法家、語學家が詩歌を詠ずるとをば一種の先天的職業の如く心得、世人も亦敢て怪むことをせざるは甚だ謂はれ無き事ならずや。詩歌は別種の才を要す、訓詁釋義、文法語法の知識とは全く其類を異にす。

是奇異なる習慣は現に今日に於ても尙ほ持續せられつゝある也。今の所謂新體詩人と稱する輩も、其十中の七八は、皆多少國文の教育を受けたる學者なるが如し。彼等は決して詩人たらしむが爲に國文を學びたるにはあらずして。唯國文を學びたる序に詩人たらしむとの野心を起したるものみ。所詮は、國學者とし云へば同時に歌人たる在來の奇異なる習慣によりて其新體詩を作るもの、多少古語雅語に通じたりと謂ふの外、何等詩才詩情の特に常人に勝れたるものあるに非る也。されば其作に詩歌のまことの生命無く、唯文字章句を巧みに排列して俗目を喜ばしむる一種の

玩具たるに過ぎざるは、是非も無き次第とや謂ふべき。是れ詩壇の外道なり、吾等の所謂偽詩人なり。

吾等は最早や彼等の作り泣き、作り笑ひに飽き果てぬ。吾等の欲するは、靈魂の聲なり。良し其聲は訥れるとも、吾等にもその響きを返すべき靈魂あり。そは靈なるもの、み靈を知り得べければなり。

去れ偽詩人よ、文法と古語とを以て詩を造らむとする偽詩人よ、今は是れ詩歌革新の時機なるぞ。(三十一年六月稿)

### 朦朧體の末路

新體詩の病根は其保守的精神にあり。今の擬古派の一輩が營々として回護に力むるは、偶々新體詩今日の衰勢を説明したるに過ぎず。其論據を近世の詩學に求め、一知半解の見を挾みて、鉅釘附會に窮々たるの状

は、保守派が最後の氣焰として吾人之れを一笑に附したりき。

新體詩は其創作を以て其評價を求むべし。議論を以て之を回護せむとするの事實、是れ己に其末路を豫告したるものに非ずや。區々の談理は素より趣味の判断を如何ともすること能はず。今や保守的精神の極弊は事實に於て新體詩昨今の窘塞を招致せり。

格調に執着するの弊は眞情の流露を妨げ、古雅を偏向するの弊は思想の朦朧を致す、之を以て文字冗漫にして感情緊切ならず、之を讀めば數行にして睡魔の襲ふ所となる、人の心思を昂揚し、感極まつて慟哭せしむるが如きは、是等の詩に於て夢にだも望み得べからざる所とす。

夫の所謂朦朧派は其情を飾るに文を以てす、之れ胸より胸に傳ふべきものを、口より口に傳へむとするなり、誤らずや。彼等は未だ眞情流露の響を解せざるなり、徒に文字格調の末技を弄して人を動かさむとす、



夫の朽木を彫せむとするものに類せざるか。

吾人は今の新體詩を讀むを好まず。又擬古派詩人が早晚時勢に醒覺せられて自ら其非を悟るの時あるべきを信じてたるを以て、故らに彼等が迷妄を攪破せむとを務めざりき。彼等の信ずる所必ずしも誤れるに非ず、只其保守的精神の爲に其根柢を腐蝕せられたるは深く惜むべしとなす。

鳥崎藤村の『四つの袖』は朦朧派の病弊を最も明に表白したるものなり。藤村は現今の新體詩家中の錚々、作品の醇雅、思想の高潔を以て夙に同人の間に推さる。『四つの袖』は彼が近業中尤も苦心經營の作として傳へられたる者、四行を一節とし、節を重ねること九十有八、無慮二十四頁に亘る。其長さを以てするも近出抒情詩中の最大なるものなり。

『四つの袖』は抑々何事を歌ひたる者なるか、吾人一讀して之を解すること能はず、再讀三讀して僅に其髣髴を模捉し得たり。あゝ戀愛なるもの

は是の如くしての外は歌ひ得ざる者なるか。『四つの袖』を解するの勞苦を以て、吾人は慥にスエデンボルグを一讀することを得べし、其艱深朦朧、何人能く之を釋き得たるもの乎。感情の幽遠なるものは文字自ら艱深ならざるを得ず。『フハウスト』や、『エンデミオン』や、誰か淺易の辭を以て之を書せざりしを咎めむや。然れども『四つの袖』の難解は思想の深邃、感情の高遠より來るにあらずして、全く措辭語句の冗漫朦朧より來る、無用の形容に富める是の如きは桂月鳥山等の作中にも未だ曾て見ざる所なり。比興工ならざるに非ず、措辭造語亦纖巧を極む。獨り詩趣の索然たるを如何せむ。

なまけの水掉こひの舟

二つの袖を海として

うす紫に匂ふゆる

首節の四行己に解すべからず。

あ、朱孟を舟として  
なさけにうかひこひに酔ひ  
君のほとりに漕きくれば

盲にかへる我身かな

何ぞ夸大の甚しきや、形容も是に至りて其の弊に堪えず。

それもゆめかよ敷ふれば  
こひの初峰、そての淵  
おもひの川の一葉舟  
涙の谷のわすれなき

に至りては、錯張工究まりて、迂拙寧ろ噴飯すべし、一篇九十餘節の中  
語様ならざるもの殆ど希なり、之れ驚くべき事ならずや。

あ、わが戀は夏雲の  
かげに照る日の熱ければ  
涼しき風の吹きかよふ  
君の聲こそこひしけれ

あ、わがこひは夢をく

胸若の葉のしげれば  
やさしき涙ふりそ  
君の雨こそこひしけれ

心の闇路むねの屋

こひの道芝ふみまふ

短き夜のあけそめて

いとも露けき夏の朝

風雲月露に托して情を抒ふるは、小歌曲の事のみ、九十餘節の長篇を通  
じて是種の形容に充つ。朦朧ならざらむと欲するも得べけむや。

『四つの袖』は朦朧體の弊を極端まで演繹したるもの、所謂擬古派の詩人は深く之鑑にみざるべからず。

### 非國民的小説を難す

凡そ文學を與へざるの世は則ち是れあり、文學を要めざるの世は則ち是れあらざる也。唯夫れ缺けたる所必ずしも充たさるゝものに非ず、往々事志と違ひ物其願に稱はざれば、茲に懊惱煩悶の病を生ず。吾は思ふ今の社會は文壇に對して是病に罹れるに非ざる乎。

吾が見る所を以てすれば、今の文壇は何れの方面に於ても落莫を極めたり。青春の意氣は殆ど消磨し去りて老衰の死相何處にか現じ來らざる。さながら紅花綠葉の面影はゆく春と共に名殘なく、黃茅白葦の秋風に揺落するを眺めて塵かに懷を遣るが如し。夫の詩人小説家と稱するともが

らは、猶蛺蝶秋に瘦せて風の冷かなるに堪へず、塵に衰殘の黃花を擁して昔日の夢を繰返すが如しとも見るべきか。あはれ人の文學を要せざるに非ずして世の文學を與へざるや、茲に一世の人をして缺焉として悲む所あらしむ。抑も誰が罪ぞ。吾れは文壇革新の時機の方に迫り來れるを見る。

試に見よ、文壇の大半を占領せる小説文學の現状今將た如何にぞや。過ぐる二十年の進歩は實に驚くべきものなりしが、斯る進歩は尙ほ將來に於ても持續せらるゝの望ありとするか。顧みれば、坪内逍遙が小説神髓と書生氣貫とを以て初まれる明治の小説は、一轉して二葉亭の『浮雲』となり、硯友社の我樂多文庫となり、更に美妙齋の『夏木立』となり、寫實主義は茲に一代の風尚を成したりき。紅葉露伴二子は寫實主義の高潮に駕して覇を壇坫に稱すること幾年、其褊狹なる寫實の漸く世に厭かるゝや、

所謂擯髮小説となり、探偵小説となり、更に一轉して所謂觀念小説となりき。然れども觀念小説の主觀的傾向、亦永く時尙を維持するに足らず、其怪奇と深酷とは幾くもなく拋棄せられ、文壇に寄與せし所は唯其心理解析の一事のみ。爾來所謂社會小説の將に起らむとして未だ起らざるあり、作家の中或は一脚を觀念派の殘墟に住め、一脚を客觀派の舞臺に投じ、彷徨爲す所を知らざる者あり、或は寫實主義の舊趾に據りて而かも其褊狹なる主觀的傾向を擺脫せむと務むるものあり、所謂先進大家の輩は概ね想濁れ筆澁り、徒に舊套を補綴して新衣を裁せむとするのみ。是を以て千篇多くは一律に出づ、所謂新進作家の多くは、其幼稚なる閱歷と學識とに依りて其清新の詩情を發抒せむと務むと雖ども、未だ人生の大觀を得ず、或は以て少年少女を喜ばしめむも、未だ以て一世の風尙を壘斷するに足らざる也。其未熟なる人生觀に本ける主觀的潤色の如きは、

偶々觀念小説の轍趾を襲ふに過ぎざるのみ。顧ふに逍遙が『小説神髓』の一篇を以て寫實主義の大旗幟を翻へし、在來小説の荒唐失體を道破し、天下の文壇期年ならずして翕然として是に赴くに當りてや、明治小説の前途洗々洋々としてさながら海の如きものありき、今にして是を思へば殆ど今昔の嘆に堪へざるなり。

さはれ吾れは今日の小説を以て十年前の小説に劣れりとするものにあらず、唯其發達の經行を依傍し來れば、前途の甚だ荒寥ならむことを憂ふるのみ。或は問はむ、進歩せるもの、將來に望なきを得るかど、吾は即ち一個の最も簡單なる事實を以て敢て讀者の注意を促さむ、今の小説の最も賣行好きものと雖ども、其部數三千を出でずと云ふ。是れ果して何事を意味するものぞ。吾を以て見れば、是れ即ち今の小説が國民的ならざるの一證なり、あはれ四千五百萬人の中、購讀者僅に三千を超えずとせ

ば、是の如き小説は國民の生活嗜好幸福と殆ど爲すなきの小説に非ずや」  
 今の批評家小説家の言ふ所を聞けば、是れ社會的嗜好の卑きが爲なり  
 と、吾は今の社會の有する文學趣味を以て高尚なりと思惟する者に非ず、  
 然れどもおしなべて今の小説を了解する能はざる程卑き者とは思はず、  
 換言すれば、今の世に今の小説を了解するものは僅に三千人を超えずと  
 は思惟する能はざるなり。却て思ふ批評家小説家が是の如き理由を以て  
 今日の文學を回護せむとする事、即ち是れ今日の小説をして是の如く落  
 莫たらしめたる原因には非ざるか。吾は我日本を以て文學的書籍の購買  
 力に於て爾かく無能力なりと思惟する能はず、現に一傳奇小説を著はし  
 て洋行費を獲たる人すらありしに非ずや。苟も其性情の要求に満足を與  
 へ得るものならむには、國民の是を求むる豈管に三千に止るべけむや。  
 そもく了解と満足とはおのづから別種の概念なり。現在本邦國民の知

識の程度にありて、今の駄小説の意義を了解する能はずとは、到底吾が  
 想像し得ざる所なり。唯是によりて其性情の満足を得ざるが爲に、爾か  
 く國民の顧みる所とならざるのみ。吾は茲に到て國民的性情の遂に動  
 かすべからざるものあるを見る也。

坪内逍遙か持ち來せし寫實主義の改革が、我小説史上の一新時期なる  
 ことは言ふまでも無し、然れども氏に次で來りたるもの、一意是の主義  
 を遵奉して其他を知らざるに及びて茲に寧ろ其弊を見き。吾を以て是を  
 見れば、明治二十年以後の小説は其進歩と共に漸く國民性情に遠かれり。  
 是れ今日の極衰を致したる所以也。而して是極衰の萌芽は實に逍遙ガ『小  
 説神髓』の一卷に包藏せられありしなり。

蓋し明治十八年以前の小説は、概ね徳川文學の遺鉢を繼承し、馬琴種  
 彦の荒唐を學ぶに非ざれば、一九春水の鄙俚に倣ふもの、然らざれば西

洋小説を摸倣して生呑活剝に陥れるもの、何れも時節後れのものにして明治新時代の産物としては甚だ幼稚のものなりき、東海、鳴鶴、龍溪、鐵腸、諸子の多少新思想を以て筆を小説に染めたるもの無きに非ざりしと雖も、其著作は新時代の新好尚に對する一定の見地と明確なる意識とを以て現はれたるものに非ずして、單に在來小説の缺陷を補充せむとする盲目的煩悶に過ぎざりしに似たり。是時に當りて東西文學の比較研究によりて我小説の過去現在を觀察し、詩學もしくは美學の立場より小説の理想を説き、以て將來の方針を案定したる者は實に我坪内逍遙なりき、實に從來傳奇小説の荒唐を喝破し、寫實主義の甘露門を開き、世を擧げて舊趣味の中に困睡し一人の能く勸懲主義の陳套を穎脱するもの無き時に當り、我昏々たる小説界をして十九世紀文學思想の光明に浴するを得せしめたる逍遙が功績は、永く史上に赫灼たるべきなり。而かも吾

れは敢て言はむと欲す、氏か『小説神髓』の中には我小説今日の落莫を來すべき禍根を包藏せりと、何を以てか是を言ふや。』

『小説神髓』説く所に二面あり、一面は寫實主義の唱道にして他の一面は勸懲主義の打破なり。何をか寫實主義の唱道と云ふ、人情を以て小説の主腦となし、世態風俗是に次々と云ふ者は是なり。以爲らく、小説家の本務は人情の奧秘を穿ち、心裏の活動を描寫して周密精到なるにあり。夫の和漢の稗官者流が、偏に脚色の骨髓に入らむを務めて寫實の皮相に止るを憂へず、是れ眞小説に非ざるなり。又以爲らく、夫れ小説家は猶ほ心理學者の如し、宜しく心理學に基きて其人物を假作すべき也。苟も自家放誕の意匠によりて強て人情に悖戾せる人物を作り出さば、其脚色は如何に巧妙なるも、未だ以て小説と稱するを得じ。何となれば是の如き人物は、作者が想像裏のものにして、人間世界に實在せるものに非ざればなり。

是を以て八大傳の八士の如きは、寧ろ仁義八行の化物にして、人間に非ざるなり。更に又以爲らく、凡て小説家たるものは、専ら意を心理に注ぎ、假作の人物と雖も一たび篇中に出でたる以上は、之を活世界の人と見做し、其思想感情を寫し出すに敢て自家の意匠に任せて善惡邪正の感情を挾むことを爲さず、唯其自然の状態を摸寫するを主とすべし。

是の如きは『小説神髓』の寫實主義なりき。勸懲主義の圈套を脱する能はざりし當時にありては、是れ實に破天荒の意見なりき。脚色の末節に拘泥して寫情の何物なるかを知らず、抽象の理義に泥みて人物の個性を思はず、殆ど教訓の外に文學の意義を認めざりし文壇に向て爲されたる是寫實主義の唱道は、我が小説文學の進歩の上に如何に浩大なる利益を與へしや素より言を待たざるなり。唯是寫實主義の必然なる結果として、實世間と小説との截然たる分離を見るに及びて茲に其弊を見る。先に吾

が所謂禍根なるもの即ち是なり。

蓋し『小説神髓』の寫實主義は、他方より見れば即ち文學獨立論なり。己に所謂寫情を以て小説の神髓となす、世と人との關係の如きは素より其度外視する所なり。己に所謂人物事件を作るに於て自己の意匠を用ひて善惡正邪の感情を挾むことを爲さず、只傍觀して其自然の經行を摸寫すべしとなす、是間實世間をして毫絲の累を及ぼさしむるを許さざるや素より論無し。是れレッシング一輩の文學獨立論と何の擇ぶ所ぞ。是獨立論の爲に先づ打撃を被りたるものは即ち勸懲主義なり。以爲らく、我邦の小説作者は是理を悟らず、ひたすら笠翁が套語を株守し、苟も事を凡近に取りて意を勸懲に發するに非ざれば則ち小説の體を失へりとなし、預め獎誠の摸型を造りて強て脚色を補綴す、甚だ笑ふべきなりと。吾れは是寫實主義の唱道と勸懲主義の打破との一部に於て、慥に動か

すべからざる一個の小説論を見る。然れども、そが文學の絶體的獨立を道破し、全く實世間との關係を遮斷したるの點に於ては、吾れ遂に是に同ずること能はず。げに逍遙自らが實世間の道義を蔑視せしに非ざることは、彼が『寫實小説には求めずして諷刺諷誡の法備はり、時に人を教化するの力あり』と説けるにても明なるべし。然れども是れ寧ろ小説の偶然性として見たるもの、必然性として推奨したるに非ざるなり。吾れの目的は逍遙が論旨に就て是非せんと欲するに非ず、唯是の如き小説論が明治十八年以後の我文壇を風靡したるの結果として如何に遂に今日の落莫を招致したるかを審にせむと欲するのみ。

逍遙以後の小説家が有せる小説の概念は、所詮『小説神髓』の寫實主義によりて鎔鑄せられたるものなりき。二葉亭四迷の『浮雲』を初として、美妙、紅葉、露伴、以下の著作の何れにも、勸懲主義は其片影だも現は

さざりき。美妙の『夏木立』、『胡蝶』、露伴の『風流佛』、『葉末集』、紅葉の『色識悔』、『伽羅枕』、『三人妻』、以下硯友社諸氏の作は、何れも純粹なる寫實主義の小説なりき。素より是等の著作の中或は『求めずして諷刺諷誡の暗に人を教化するの力あり』しならむ、而かも是の如きは作者が初めより預期匠作したるものに非ずして、寧ろ偶然の結果に屬す。彼等の作意の根柢を叩かば、實世間と文學との關係に就ては毫も意識する所無く、唯漠然として文學獨立論の單純自由を利とせしならむ。想ふに彼等は道義の觀念を以て全く文學以外のものとなし、其著作に就ては、逍遙が所謂寫實小説の上乗なるものは求めずして道義の軌に合せむと云へる如き信念をだに有せざりしならむ。彼等の後に來りたるもの、所謂擯棄小説あり、所謂觀念小説あり、然れども今日に到るまで小説文學の中堅をなせるものは、依然として是文學獨立論の上に立てる寫實小説なりとす。



吾れは敢て是寫實主義を以て小説界今日の落莫を致したるものとなす何となれば文學獨立論は即ち國民性情の蔑視を意味し、國民性情の蔑視は即ち是の如き文學の非國民的なるを意味すればなり、非國民的にして其國民に歡迎せられしもの、未だ曾て是れあらざる也。

多くの人は今の小説の衰微を以て、國民的嗜好の卑下に歸す、是れ其末に走りて其本を忘れたるもののみ。文學は人の爲に存在す。人文學の爲に存在するに非ざるなり、文學何が爲に人の爲に存在す、人は是を要すればなり、何が爲に是を要す、我を幸福ならしむるが爲なり、我を幸福ならしむるとは何にぞ、我性情の要求を満足するが爲のみ、然ば則ち國民的性情を満足せざる所の文學は、是の如き國民と何の爲す所ぞ、衰微落莫素より其所のみ。是根本的問題を抛棄して、徒に趣味嗜好の高下を説く抑々末のみ。

試みに問はむ、過ぐる十年間の寫實小説は、果して何れの點に於て國民的性情を解釋し、若しくは是を満足したりとするか。日本國民は快潤樂天の國民なり、然るに寫實小説は悲哀厭世の恨事を説く。日本國民は尙武任俠の國民なり、然るに寫實小説は涕淚柔懦の事蹟を語る。日本國民は世界の中に於て最も道義的情緒に富める國民なり、然れども寫實小説は却て彼等に向て非倫敗徳を獎む、日本國民は忠孝義勇を以て人道の大本となす、然るに寫實小説は一も君父を言はざるなり、日本國民は家系の繼承を重じ國家の運命を懸念するに於て世界其比を見ず、彼等は君父の爲に死するを以て最高の名譽となし、國民の利福は獨り國家の昌榮の中に見出し得べきことを確信す、然るに寫實小説は却て彼の爲に情死を説き、民權を説き、平等を説く。花柳の情恨、市井の屠沽、寫實小説是を寫して往々其精巧を究む、而かも國民的意識の深底を深りて其性情

最後の琴線を打弾せしものし果て幾何ぞ。是を以て作家の技巧愈々精にして國民の是を去ること愈遠し。宜なる哉、今の小説が殆ど作家評家の間にのみ賞翫せられ、國民を擧げて門外漢たるの奇觀あるや。

若し今の作家評家に向て、矢野龍溪の經國美談、末廣鐵腸の雪中梅、花間鶯等の如き小説が、何故に爾かく國民の歡迎する所となりしかと問はゞ、想ふに彼等は國民的嗜好の卑下を以て答ふるならむ。然れども吾を以て是を見れば、是れ其一を知て未だ其二を知らざるものゝみ、國民は是等の小説よりて自己の性情の解釋せられたることを認めしが爲には非ざるか。八犬傳と忠臣藏とは、兒童走卒も是を知らざるもの無し、蓋し是二者は今の作家評家の所謂趣味下劣なるものならむ。而かも國民的文學として吾れは先づ是二者を推さざるを得ず。是れ決して脚色の巧妙、文辭の流麗等の末節によりて解釋せられ得べき現象に非ざるなり。是を今の小

説の賣高多くとも僅に三千部を超えざるに比して、徐ろに國民的性情の勢力に想到せば、思ひ必ず半を過ぎむ。

今の批評家は村上浪六が所謂撥鬚小説の流行を以て、單調なる寫實主義の小説に倦厭せる讀書社會の一時の反動となす。是れ亦其一を知て未だ其二を知らざるものなり。當時紅葉一輩の小説の、兒女の滄涙多くして丈夫の意氣に乏しく、柔弱平板、褊狹單調なる、素より所謂撥鬚小説の流行を招致したる一原因なるべし。然れども、抑々又任俠義に勇み、而かも風流韻致に富める、三日月次郎吉、井筒女の助一流の人物性格が太だ我國民性情と相近きものありしが爲にはあらざるが。蓋し尙武義勇は我國民の一特性なり。一言の然諾を重じ。甘じて身命を抛ち、己を知るものゝ爲に一死を顧みず、是れ豈所謂武士俠客の精神に非ずや濶達物に拘らず、而かも意氣相感すれば死生を以て相許す、是れ慥に我國民の一

部理想的人物なり。故に吾れは想ふ浪六小説が一時那の如き大流行を極めしは畢竟是一事國民性情を解釋して其肯綮に當りたるものあればなりと、今日弦齋、澁柿園諸子の小説が、批評家の鑑賞甚だ喧しからざるに拘らず、紅葉、柳浪、諸子の作よりも遙に多くの讀者を有するの事實も、一部の理由亦是によりて解釋せられ得べきのみ、吾れは實に夫の國民的性情を蔑視して、徒らに讀者嗜好の鼻きを嘆する、今の滔々たる作家評家の大膽なるに喫驚せずむはあらざるなり。是れ皆寫實主義の唱道せる文學獨立論の弊害なり。

是弊害の最も明晰に表はれたるは、日清戦争の當時にあり。王師海を越て西に動き、國を擧げて國家的精神の大運動に熱中せし時、我濟々たる小説家は果して何事を爲たりしや、我國家が國命を懸けて東洋の平和を争ひし時、彼等は其戀愛談に苦心するを以て文士の本分を知れりとなし

たりき、兵は戰に臨んで生還を期せず、而して闔國の民唯其兵たらざるを恨みとし、一朝令の下るを待ちて商は牙籌を捨て、農は鋤鋤を抛ち、學者は其書と筆とを擱きて共に銃劔を握らむことを期せし時、彼等小説家は冷眼にして世上を看他し去り、一人の其筆に火して愛國義勇を唱へたるものあらざりき。偶々二流以下の小作家が戦争談を著はすあれば、彼等は却て際物師として擯斥し去りたるに至りては、吾れは殆ど彼等小説家に國家的觀念の存否を疑はむと欲するなり。勢是の如きを以て、戦争と文學と殆ど相知らざる爲して通過し去りたりき、想ふに當時の小説家は、不幸にして我國家の没落に遭遇するも、尙ほ其戀愛談の補綴に日も亦足らずとせしならむ、否らされば中夜月明に乗じて亡國の殘墟を訪ひ是好詩的題目を與へたる上帝の恵を感謝せしならむ。あゝ國民は是の如き文學者と何の爲す所ぞ。彼等は何を以て實世間を賤しむか、ゲーテが

其母國の運命に冷淡なりしを以て誰かアルント、キヨル子ル、ルユツケルト、ウーランドを詩人ならずと謂ふか。世界の苦痛を歌ひたるレナウは、熱心なる愛國家なりしに非ずや。吾れは我小説家の實世間に冷淡なるを見て、曾て洛陽少年の唱へたる文學亡國論の、強ちに齊東野人の語に非ざるを認む。所謂寫實主義の弊、是に到て極まる。而して其端を啓きたるものは實に坪内逍遙が『小説神髓』の一書にあり。

吾れは茲に逍遙の舊著を難するものに非ざるなり。實に彼の如き時代にありて彼の如き説を爲す、矯弊の立言として寧ろ應病與藥の旨を得たるものと謂ふべし。唯其後に來るもの、是一面の理を看取して直に全般の事に充て遂に一世の文學を誤るに到る、深く概嘆すべきなり。

然れども既に去るものをして去らしめよ、今は即ち是極弊の文壇に對して、其根本的革新を斷行すべき時機にあらずや。是を爲すの法、唯國

民性情の満足にあり。是に於てか小説家は自家の褊狹なる嗜好を捨て、去て國民に就て其意識を撿覈せざるべからず。作家今日の覺悟は既に其第一歩に於て其道を誤れり。其技愈進みて其作愈行はれず、畢竟非國民的文學なればなり。(三十一年三月稿)

### 曲 亭 馬 琴

今の時に當りて日本文學の爲に其前途を劃せむとするの誠意あるものは、必ずや先づ國民性情を言はざるべからず。

今や幾多の小ゴットシエツドは到る處是れあり、然れども未だミルトンを拒みたる一瑞西派だにあるを聞かざる也。安ろ一の大レツシング無きを怪まむや。

今の詩人小説家は果して我國民の性情を解するか。吾人が彼等に對し

て言べき所唯是れのみ。

セルヴンテス、カモーエンスの詩人たるや、何故に英佛獨にあらずして特にイベール半島にありや、ゲーテ、シルレルの詩人たるや、何故に英佛以にあらずして特に獨乙にありや、抑もダンテは何故に英國の詩人たらずして以太利の詩人たるか。彼等の不朽なるは各々其國民的詩人として國民性情を發揮したりしが爲に非ずや。

吾人は是點に於て我曲亭馬琴を偉とせずむばあらざるなり。彼の作一度び世に出づるや、當代の荒唐なる草雙紙、浮艶なる浮世草子、無趣味なる實錄仇討物に倦厭せる社會は、翕然として是に赴くこと水の低きに就くが如かりしは何が爲ぞ。彼の該博なる學識や、雄麗なる詞藻や、將又巧妙なる脚色や、素より其流行に力ありしならむ。然れども一世の風尚を化して文化以來の小説界に一生面を拓發したるものは實に其勸善懲

惡の大主義に非ずや。彼れは是點に於て慥に文人功名の秘訣を解し得たるものなりき。

何を以てか是を言ふ。

彼れの小説は、今日より見れば其技工の拙なるもの多きは言ふまでも無し。其事例の怪奇にして人物の不自然なる、又強いて地を作り、務めて理を構へ、時として老農故事を説き俠客道を談ずるの奇觀を呈したる、將又務めて知を擧げて情を抑えたる、何れも小説の體を得ず。唯其の勸懲主義のあるあり、百年の後凜乎として尙ほ生氣あり。實に彼れが唱道せる是主義こそ我國民性情の現世的道義的傾向を投射して尤も明斷なるものなりしなれ。殊に其力を極めて描寫したる武士道の如きは、任俠氣に勇む大和民族の尙武的氣象を鼓舞し、讀者をして嚮慕興起の情に勝えざらしむ。實に彼れが小説は、幾多の欠陥あるにも係らず、其國民的な

る。の。點。に。於。て。、長。く。後。昆。の。勲。賞。に。資。す。べ。き。な。り。  
 而。し。て。吾。人。の。尤。も。馬。琴。に。於。て。貴。し。と。す。る。所。は、我。國。民。が。彼。の。作。に。よ。り  
 て。慰。籍。と。教。訓。と。を。求。む。る。こ。と。に。於。て、同。時。に。國。民。性。情。に。尤。も。健。全。な。る。進  
 歩。の。動。機。を。與。へ。得。べ。き。事。に。あ。り。

借問す、今の小説家は是點に關して什麼の覺悟かある。嗚呼靈火一閃、  
 國民性情の核子に點せよ。河嶽の流峙、日星の光耀、其れ何者か是を壅  
 塞するを得む。(三十一年二月稿)

### 國民的生活と美術

先つころ上野公園に開かれし繪畫共進會の展覽會に、幅三間、長一間餘  
 りの大畫幅を出せしものありき。人あり吾れに問ふて曰く、何に用ひむ  
 とて斯る畫幅は作られしぞと。

畫家より見れば、是れ極めて平凡なる問なるべし。されど吾が見る所  
 によれば、是一疑問の中には今の美術家が謹で教を承くへき最も聰明な  
 る訓誡ありてこもれり。

美術は、其種類の繪畫なると、彫刻なると、はた音樂詩歌なるとを問  
 はず、所詮は吾れ人の生活を幸ならしめむが爲めに起れるなり。而して  
 歳時と方處との異なるに隨ひて、吾れ人が生活のありさま亦おのづか  
 ら異なるものなれば、其時と處とに隨ひてその特殊の生活にそれく  
 の満足を與へむは、美術家たらむもの、ゆめ忘るべからざる所なり。凡  
 そ、美術の盛なると衰ふると、亦多く是心懸の張弛による。是れ各國美術  
 史の歴々として證する所なり。

今の我邦にて、幅三間、長一間餘りの畫幀に、日本畫を描けるものを  
 何に用ふべき。普通の住居にては、富豪の大廈高樓を以てするも、恐ら

くは容るゝに所なかるべし。是を楣間に掲げむか其長さを如何にすべき。是を床間に垂れむか其幅を如何せむ。縦に割りて屏風となさむと欲せば、人面二つに分る、是を西洋風の建物に用ふを得ば、其大さは差支なからむも、日本畫の様式の全く西洋風の建築裝飾と相適はざるを如何ともするなけむ。所詮かゝる大畫幅は寺院の壁に張るか、又は美術學校の參考室にでも保存し置くの外、用ふる所無かるべし。

こは一例なり。美術にして吾人が生活のありさまと分離せば、其存在の目的を那邊に求むべきや。繪畫の如きは、其性質として屋外に暴露して保存すべきものに非ず。必ず吾人の住居の中に配置して翫賞せらるべきもの也。斯るが故に、畫家の筆を畫幀に落すに當りて、第一に考ふべきは、其が建築との調和如何と云ふことならざるべからず。而して建築なるものは是に伴ふ諸般の裝飾と共に、是に住居する人の生活の特質に

よりて定まれるものなれば、畫家も亦國民の生活の状態に着眼せざるべからず。斯の如くにして初めて國民の生活を満足すべき程の美術は作り出さるべき也。斯く言はゞ、美術の自由甚だ狹まり、其品位亦いたく下れる様に思ふもあらむかなれど、苟も是社會に存在して萬人の翫賞に堪えむ程のものは、是れ程の束縛は忍ばざるべからず。美術存在の意義亦實に存する也。

且夫れ吾人の最も注意すべきは、古より大なる美術家と呼ばるゝ人々は、決して社會生活のありさまに反對して、放埒氣儘の製作を爲しゝものに非りし事是也げに大なる詩人美術家は、多くは其身を以て其社會もしくは時世を代表せる者なり。一代一國の感情希望を以て己れの感情希望となし、億兆同胞の心を以て其心と爲しゝ者なり。されば其製作一として國民の性情に適ひ時代の精神を現はさゝるは無し。彼は社會の束

縛に屈從するものにあらず彼の心、即ち社會の心なればなり。彼は時世の制約に反抗するものにあらず、彼の心、即ち時世の心なればなり。夫の社會の束縛、時世の制約なからましかばなを嘆つともがらば、畢竟其才劣り其力足らざるもののみ。須らく自ら省みて靜に修養の功を積むべきなり。

されば吾れ敢て今の我國の美術家に告げむ。公等其技を練り其腕を磨く、須らく常に其到らざるなきを期せよ。唯念頭國民生活との一致であることを就いて、不斷の用意を懈らざれ。吾れ又敢て今の我邦の美術家に告げむ。古より美術隆盛の時代は、常にそれが國民生活と一致せる時代なり。西洋美術史上、黄金時代と呼ばれるは、ペリクレス時代の希臘美術と、文藝復興期の伊太利美術となり。彼れにありては、建築は宗教の所生にして、彫刻は建築及び宗教の儀式と密接の關係を有す。是れ其盛

なる所以なり。此にありても亦然り、其彫刻繪畫は、其建築と相伴うて、基督教的社會生活と離るべからざる因縁を有す。是れ其盛なる所以なり。我朝の天平聖武時代にしかく美術の盛なりし理由も、當時佛教の盛なりし事、是に伴うて佛教の建築盛に行はれ、隨て佛像佛畫の製作亦需要せられる事等に歸着すべし。美術が社會生活と一致するに非ざれば、其隆盛を期し難きの理、亦おのづから明なるべし。十七世紀以後の歐洲美術は、文藝復興期の美術の統一なるに反して、分離の美術と見るを得べし。建築、彫刻、繪畫、裝飾、各々其趣味を異にし、各其れのづから獨立の存在を有せむとするもの、如し。是れやがて社會生活と美術との分離を示めす。文藝復興期のフロレンスに見る如き、豊麗圓滿なる美術的天地の今日に見かたき所以、亦主として茲に存すべき也。吾れ嘗て國民性の解釋を我小説家に勧めたる事あり。今又美術家に向て同一の要求を提



供せむ。

春のや主人の『牧の方』を評す

劇文學の寂れたるや久い哉。脚本改良の音沙汰も何時しか絶えて、年毎にたち増りゆく大小の劇場に、假名手本忠臣藏は今も尙ほ獨參湯のきゝめを顯はしぬるけふ此頃、春のや主人が『牧の方』は如何ばかり吾等が心を強からしめたるぞ。

同じく文學の中にも、小説は兎にも角にも本邦今日の文明に隨れて進み行けるに違ひて、如何なれば劇詩脚本のたぐひのみは獨り斯の如く振はざるや。所詮は一般社會の趣味の鼻きにつれて劇部の高尚なる新作を歡び迎へざると、及び誰やらが言ひはやしけむニキビの副産物なる抒情詩や、おのが三尺の書窓を其まゝ大世界の小説などの様に作り易からぬにも由るなるべし。

ぬにも由るなるべし。

されば是數年の間に作り出されし脚本淨瑠璃のたぐひは、二三に止らざれども、武藏野も摘草にすればいとも少しや。獨り櫻痴居士は歌舞伎の樞地に據りて、頻に新作を場に上せられたれども、是翁が餘りに着實なる意見は、素より沙翁シルレルを味ひたる批評家の望を充すに足るべくもあらず。かくて世に渴仰の聲のみ高くして、劇文學の沈黙寂寥依然として故の如かりき。是沈黙を破り、是寂寥を驚かし、戯曲的文學の暗黒界に一道の曙光を照したるものは、即ち春のや主人が桐一葉なりき。讀書社會が擧りて是作を歡迎し、聲名一世に喧傳せる亦宜なりと謂ふべし。吾等の見る所を以てすれば、桐一葉は素より絶妙の戯曲にてはあらざりき。されども其全曲の精神に於て、其性格の描寫に於て、其辭藻文體に於て、其他種々の點に於て、疑もなく近世戯曲の思想を傳へたるものと

して遙に在來のものに一頭地を抽でたるものなりき。春のや氏、今や此（戯曲に於ける）處女作成功の餘勢に乗じ、更に其圓熟重鍊の手腕を揮ひて、茲に此『牧の方』を公にす。勸懲小説百年の積弊を一朝に打破したりき往年卓犖の意氣を振興し、今日劇文學の運命を双肩に擔うて立つの雄姿は、そぞろに人をして奮起せしむるもの無からずや。吾等は春のや氏が志を壯として、而して其業を偉とす。『牧の方』を評するは吾等の光榮とするところなり、

(二)

春のや氏が鎌倉時代の史料に藉りて、是戯曲を造りしは、吾等の第一に同意するところなり。

戯曲にまれ、小説にまれ、もと架空の事譚によりて人を娛ましむるを旨とすれども、明に吾れ人が確實なりとする所の知識に背くものは、吾れ人

の眞實なる同情を惹起すこと甚だ難し。そは同一の名稱、若くは外形の下に、全く異程の内容を含ませむことは、やかて人心の統一に反するものなればなり。されば何人も熟知する史上の事實をば、明らさまにつくり換へて、之を戯曲の資となさむは、戯曲家としていとく拙なき業なるべし。さらばとて、一々史籍にたどりて其事を寫さば、戯曲は遂に成り難からむ。歴史は詩學の法則通りに經過するものに非ざればなり。然らば全く空想によりて事例を假作せむか。是れ所謂世話物に於てなすべきも、時代物には施し難きが常なり。そは時代物におのづから其資料として外面的形式の廣大なる事件を要するを以て、歳時と方處とに於て限られたる史的事實か、若しくは歴史以前の傳説によるに非ざれば、吾れ人の依信を繋ぐに便りあしければなり。然らば戯曲家は其材料を何處に求むべきか。歴史上較著の事實にして而かも其由來經行の湮滅せるか、若く

は通常人に知られざるが如きものを選ぶを最も可なりとすべきなり。換言すれば、其首尾、殊に其落着の悲壯なる形跡のみ著しく世に知られ。而かも其因縁の餘りに明ならざるが如き事實を擇ぶべきなり。是の如くむば、作家は明白なる歴史の拘束を免れ、比較的自由に其詩想を構ふることを得べし、是點に於て『牧の方』は史料の選擇其宜しきを得たるものなり。

春のや氏が先年の著『桐一葉』が悲曲の形式に於て缺くる所ありしは、氏があまりに正史に忠實なるの致す所にして、所詮は史料が戯曲的材料として明白に過ぐるの致す所なり。是れ吾等が當時注意したるところなりき。『牧の方』は即ち然らず。徳川時代と鎌倉時代とは、歴史の精粗明暗に於て同日の論に非ず。北條義時の人物事蹟の如きは、優に専門史家の疑問を容るゝに足るべく、畠山一家の滅亡の如きも、北條氏と源

氏との關係につらなりて、幾多の暗流を預想するに足る。殊に將軍實朝の性格は、今日尙未決の問題なり。實朝果して在來史家の傳ふるが如く、優柔不斷なる一介の貴公子に過ぎざりしか。宴樂に沈み、詩歌に耽り、毫も天下を以て意となさざりしか。其作る所の歌、豪宕の氣一世を風勵し、超邁の慨今古を凌ぐ。是れ白面紈袴の作としては、むしろ怪むべきにあらずや。其渡宋の船を艦装したりと云ふが如き、果して單に奇を好む游蕩に過ぎざりしか。彼が奇怪なる最後の裏面には、史乘載するところの外、又何等の消息を存せざるか。正史的研究の結果は何れにせよ、是の如きは優に詩人戯曲家の豊富なる想像を包容して、一大悲曲を構ふるの骨架と爲すに足らざらむや。春のや氏は其『牧の方』に關聯して、『源實朝』を出すべしと云ふ。吾等は好雄義時の人物と共に、此奇怪なる薄倖將軍の性格、及び事蹟が如何に詩化せらるべきかを樂み見

ひと欲す。

兎にかく『牧の方』に於ける史料の撰擇は、大に吾等の心を得たる所なり。

(三)

然れども『牧の方』は獨立して完成せる戯曲に非ず。引續き公にせらるべき『源實朝』及び『左京兆』と、三者相連りて、初めて北條義時を以て主人となせる一部の史劇を構成すべしと云ふ。是事は收の方を批評するに於て重要な制約なり。

想ふに春のや氏は是三者を合せて、シルレルが『ワルレンスタイン』と均しく、三部曲 *Trilogie* となさむとするものなり。故に是『牧の方』にありては、其主人公は牧の方なりと雖も、全篇の動作は茲に其終局を告げたるものに非ず。部曲の全體よりして之を見れば、僅に其端緒を發ら

きたるものにして、其全部主人公たる北條義時より之を見れば、僅に其頭首を表はせしものに過ぎず。春のや氏自らの言ふ所によるも、

『牧の方』中に只其頭首のみをあらはしたる、北條義時、深見興致、實朝卿の三人物は、別に『源實朝』と題したる續編に於て其の胸と尾とを描きいたさむとす。其のうち、義時だけは『源實朝』にて胸をあらはし、其の續編『左京兆』に於て其の全身をあらはすべきものとす。

是を以て之を見れば、『牧の方』は由來一部完結の戯曲として見るべからざる者なり。故に其眞面目は是三部曲完成の後にあらざれば、了知することを得べからざるなり。

遮莫。戯曲家が是の如き方法によりて、一部の戯曲を成就するは、果して賞讃すべきことなりや。是れけだし詩學上の一大疑問ならむ。シルレルが『ワルレンスタイン』の *Trilogie* は、何人も知る如く、『陣營』と、『ピコロミニ』と、『最後』との三者より成る。前の二者が、全曲の主眼とす

る所の『最後』の戯曲的效果を増大し、激勵ならしめたる上に於て、多少の力ありしは素より論なし。然れども是の如く特立せる幾多の部分を以て構成せる全體は、果して能く興味の一致を維持することを得べきや。Einheit des Interesses は、戯曲最大の要素にして、かの Climax と云ひ、Höhepunkt と云ふものは、畢竟是興味の一致を支撐し、興奮する所以に外ならず。三部曲の如きは明に是利益を損殺するものに非ずや。『ワルレンスタイン』は、獨乙史劇の白眉と稱せらるゝもの、而かも卓識なるメルケルは此點より之を批難し、支離滅裂を以て之を貶じ、其『陣營』の如きは *Marnettendude vor einem Tempel* に過ぎずとなせり。（メルケルが重要なる著作に就て一女史に與へたる書簡二十一、及二十四）吾等を以て之を見れば、之れあながち理無きの説にあらず、『陣營』が『ワルレンスタイン』の罪惡の頭首を表はすは、猶『牧の方』が義時の陰謀に端緒を示すか如し。然れども果して全曲の興味

を分ち、統一を缺きたるの弊を補ふて、能く餘效あることを得べきや、之れ甚だ疑はしとなす。

よし又、單に『牧の方』をとりて之を觀たりとせよ、動作完からず。其後景には僅に頭首を顯せる幾多の人物ありて。却て前面の事件を擲擧するの實あり。是の如きは讀者の注意を統一し、看客の同情を昂揚する所以に非ざらむ。

蓋し戯曲には一定の形式あり。是れ感興受發の理に本きて作者須要の制約を成すものなり。三曲部の如きは、希臘以來の一體たるに相違なきも、之を分ては則ち支離、之を併すれば則ち疣贅。人物の數、事件の錯綜、場面の變化、時間の延長、皆共に膨大複雑に過ぎ、到底完全なる戯曲的效果を奏すること能はざるべし。吾等は是點に關して、『牧の方』を賛美すること能はず。

## (四)

春のや氏が戯曲に對する妥貼なる意見と、老練なる手腕とは、吾等の敬服するところ也。然れども、詩學上の形式論を度外視するの形跡が、氏の前年の著桐一葉に於けると均しく、是篇にも夥しく見ゆる可憐らしき『牧の方』の作者にかゝること告げむは嗚呼がましき業ながら、戯曲とは場に上れる人物の言語と動作とに縁りて、過ぎ去りたる事柄をまのあたりに表象する詩歌の一種なり。かく戯曲の中に現はる、事柄は、全く曲中の人物のはたらきの中に終始すべきものなるが故に、其由來經過を解せむが爲に、曲外に他の話説、もしくは註釋を要するが如き事柄は未だ以て戯曲的とは稱し難からむ。われ等は常に戯曲小説をば一個の有機體に喩ふ。そは其活動の因縁のすべて自家によりて説明し得らるべきを謂ふなり。是れはた戯曲の形式上欠くべからざる要素の一ならずむは

あらず。『牧の方』はたしかに是要素を蔑視せるものにあらざるか。

試にあらゆる史的知識の北條氏に關するものを、吾等の腦裏より引き去れりとせよ。而して是『牧の方』を一讀したりとせよ。吾等は疑ふ、我讀者の中、一篇の事實を明瞭に了解し得るもの、果して幾何あるべきかを。尼御臺所の義時々政に於ける、二品禪室の最後に關する、和田三浦比企及北條諸家の源將軍家に對する、もろくの事件關係は、全篇活動の素地を成せるものなるに、作者は戯曲的動作によりて之を説明することを爲さず、殆ど全く是の如き史的事實の知識を預想に附し去りたるの觀あるは如何にぞや。もとより一篇を達觀し、分析歸納の方法によりて反覆檢覈したらむには、全曲の事理をたどりつくすこと、強ちに難しとは謂ふべからず。然かもさりとは娛樂慰藉を旨とする美文學として相應しからぬ極みならずや。唯、目前の感興に擲掄せられ、全體の精神に亘りて抽象的

觀察を下すことを知らざる、滔々たる俗客は、不可思議、不合理の如何なるものをも、容認して敢て怪まざるべしと雖も、多少教育あり、嗜好高き人々の觀劇眼を如何にすべき。

試に是の如き非戲曲的預想の例二三を指摘せむに、時政が吳羽の前の辨疏に對して、『スリヤ全く世上の浮説をしづめむ爲め餘義無きはからひ、義時は申すに及ばず、尼公にも疑念はなきよな』と云ひ、はた吳羽の前が、『此流言の源は、禪室さまに加擔のともがら、同志打させうす結搆にて、申し觸らせし苦肉の策略』(第一段第三)とは、何事なるか殆ど解すべからず。第一段第一に於ける往來の雜説は、讀者をして預め這般の消息を了せしめむとの作者の注意に出でたるは勿論ながら、かくのみにては受とれじ。『若君様の千幡さまが、御膳さなかに俄の御立』を以て、世上の浮説を鎮むるの方便なりと云ふ、亦解し難きに似たり。牧の方の

怨言に、『邪推にも事を缺き、千幡君を毒害なし、あの政範を將軍家の跡目になさむ企とは』云々(一の三)とあるに及びて、始めて騷動の原因を慥め得たるが如しと雖も、是の如き説明を得るまでの三場は、如何に過ぎ行くべきかを思はざるべからず。さるにても殊に義時が千幡君を御所につれゆきしは何故ぞ。これ第二段の第三、及び第五段の第二に於ける義時の獨白を了せる後に非ざれば、是間の關係甚だ明なりと謂ふべからず。加之是獨白すらも、其意義極めて茫々、餘意多くして摸捉し難きを限とす。千幡君を救ひ出したる理由の如きは、遂に明に知了するに由無きが如し。政範の最後は腰越の宿に起れり。而れども政範が朝雅重保等を隨へて腰越に宿せし理由は、第四段の末に於ける朝雅の白に、『只こゝに一つの難儀、左馬の介は御臺所御迎の正使なるに』云々とあるにてほと知るべしと雖も、御臺所御迎と本篇との間に何等の關聯あるを見

ず。は無關係の事件を拈出して、政範最後の如き局面一變の所依となす。巧なりと謂ひ難きに似たり。殊に第三段の第一に於て、次郎重政が『幸ひ平賀の右衛門佐どのも、こよひはいまだ腰越宿り』と云ふが如きは、徒に讀者をして怪訝の念を起さしむるのみにあらずや。政範の死を聞ける牧の方の愁傷に、『敵と目ざすべき怨の的があるならば、此の悲しのみ半分は、怨にまぎれて忘れうもの。當の敵を求むれば、所詮は我が身我が心』とあるより、之を察すれば、是老夫人は其愛子の最後を以て自己の野心を諫止するの至情に出づと信するもの、如し。さるにても牧の方如何にして是事あるを知り得しや。吾等は是の如き判断の經由し來るべき十分の言動を發見すること能はず。

是の如き因縁の不明なる動作は尙是外にも少からず。吾等を以て之を見れば、作者の想を構ふるに當りて其想像の中に浮動せるものは、北條

初代史の全局面にあらざりしか。而して作者は是の如き史材の中に、牧の方を中心として、表面に顯はれたる事實のみを攝取して、以て是戯曲を成し、には非りしか、吾等が本篇を讀で、先づ感ずるところは、是戯曲中の動作は是曲中に終始し、完備するものにあらず、他に吾等の知らざる此の如き動作を操縦し弛束する、一種の動機が存在することなり。是を以て吾等の想像は、絶えず曲外の或物によりて拉取せられ、注意自ら一致せず、感興亦おのづから散漫たるものあるを免れず。是れ『牧の方』の爲に大に惜むべしとなす。

## (五)

牧の方の性格は其個性の明晰なること、其一致の維持せられたる事より是を見れば、さすがに善く描かれたり。

然れども個性の明晰、一致の維持は、形式上須要の條件たるに過ぎず。



是二者を有するもの、凡て必ずしも巧妙なる戯曲的人物と稱するを得ず。其性情の單複、人品の高下、智力意志の大小強弱と、其個人的性癖と錯綜紛糾して發展し、窒塞する情狀を曲盡するにいたりて、自ら難易あり、工拙あり。夫の心容狹窄、隨て感ずれば隨て働き、極めて簡單なる動機によりて、其云爲を左右せらるゝか如き器械的人物は、必ずしも老手を待て摹寫せざるなり。

而して吾等は如何なる人物も、均しく悲曲の主人公となり得べきを信ずる能はず。吾等は是點より、春のや氏が前著『桐一葉』に於ける片桐且元の性格を難せしことありき。今や同一の批難を以て是牧の方に臨まむと欲す。

牧の方は尋常一般の婦女子のみ。其子の愛に溺れて非道を企つ。是れ形式上尤も悲曲的たるに庶幾し。然れども渠女は是の如き大謀を成就す

る所以の材幹を有せざるなり、知淺く、慮短かく、意亦強からず、是を以て其嫉妬喧恚は尋常婦女子の嫉妬喧恚のみ。第一段の第三、もしくはは第四段の第二に於ける憤怒及狂亂は、赤條々たる感情の活動のみ、些の顧慮なく、些の蘊蓄なし、其他の爲に揶揄弄せられて陰謀の方便に使用せらるゝを外にして牧の方自身の性格に於て悲曲的勇者に相應はしき何等の活動を見ず。第二段の第二に於ける變心は、尋常婦女子の滄涙に陥りて、意志の薄弱を示めせるもの、因循姑息ならずとせむや。堂内の密談によりて弑逆の大望を見合せたるらしき、政範の死をきゝて畠山父子の復讐に餘念無かるらしき牧の方が、末段に至りて更に當初の大望を、果さむが爲に猛進す、其變心の動機はもとより、依て以て其大野心あるを得たりし所の愛子の死後に於て、尙其大野心を繼續するの情理、殆ど解すべからざるものあるにあらずや。もし又之を以て性格の一致を失はざ

るものとすれば、牧の方が堅持耐久の眞實に乏しき、いよ、是の如き悲曲の大陰謀を醗酵するに適せざることを證するものにあらずや。

之を要するに、牧の方は是の如き大悲曲の勇者たらむには其性格あまりに單純に、あまりに淺薄に、又あまりに平凡なるに過ぐるなり。渠の

女は須らくシルレルに於けるテルツキーの如く、イサベラの如く、マルサの如く、若しくは沙翁に於けるマクベス夫人の如くあるべかりしなり。

牧の方の性格がしかく非悲曲的なるの結果として、精神氣魄の全篇を通じて壯大雄烈なるもの無く、人をして骨鳴り肉躍る底の感情の大昂揚

を見る能はざりしは、惜みても猶餘りあり。蓋し悲曲の快感は、其勇公に對する吾人の同情に職由す。彼が英邁なる氣質と、剛健なる意志とを

挾み、滔天の非運に反對し、抵抗し、煩悶し、没落するの情状は、洵に吾等の情想を激揚して、吾等をして吾等が精神中に一種の異常にして高

尙なる調趣を意識せしむ。吾れ悲曲を讀み、終宵卷を措かず、勇者と共に感動し、沈思し、嗟嘆し、憤慨し、天理人道を敵として斃れて而して已む。吾れ自ら顧みて恍惚として一種超絶の理想界に往住したるの思ひあり、是れ吾等がワレンスタインを讀み、マクベスを讀み、マリア、スチュマルトを讀みたるの感情なり、あ、牧の方何んぞ獨り其興味の索然たるや。

(六)

主人公たる牧の方の性格が悲曲的に非ざることは、畧々之を述べ畢りぬ。然らば其副人物は如何に。

北條時政は牧の方の感情の少しく温和にして、性質のやゝ率直なるもの

み。紙牘の愛に溺れて思慮なく、勇斷なき、一介の老武士は、暴亂の女主人公に配して其性格の對比の著しきを見る。左馬權介政範は十四の

幼童としては言動あまりに大人びたるの嫌なきか。著者は何故に殊に是弱年を須要とせしにや。一幡丸との肖似を利かせむが爲なるべけれどもさりどては術なきの極ならずや。平賀朝雅はほゞ義時の小なるものか。稻毛父子を願使し、牧の方を操縦し、己が大望に資せむとして、たまたま義時の大逆謀に羅蔽せらるゝを悟らず。義時の遠謀を較著するに力ありと雖も、單調一律の弊無きか。牧の左源太輝英は、始終疎忽者狼狽者として現はさる。然るに牧の方を初め用意慎密なる稻毛入道まで飽迄之を信用し、安じて『大事の御使』を托したるは如何に。畠山重保及照子の前に至りては、作者苦心の十一の効果だに現はれ得ざりしを恨みとす。

さるにても照子の前の戀路の果敢なさよ。冷々淡々己を見ること路傍の人に異ならざる重保に對する、至深至切なる愛情の花は、照子の爲に

如何なる果を結びしぞ。あはれ七夕の雷雨にそぼ濡れて、腰越驛の渠が愁訴は、思ひきや重保の一喝に却て斷命の縁とならむとは。あゝ照子は、何が爲に戀せしか。忠實なる折枝と可憐なる照子との一命を犠牲にしたる是戀には、『オ、其心は是の重保よう推量して候ふや』の一言にして癒し去られむには、餘りに痛はしく。餘りに激しき者なからずや。想ふに照子は満足して死したるべし、されど讀者は平かならざる也。更に想ふ、照子の戀は、全曲と何の關するところぞ。吾等は是不愉快なる一條の戀愛談を以て敢て『牧の方』の懸疣となす。オフェリヤも、蠅も、是の如くにして死せざりき。

直に過ぎたる重保は、尤も興味なき忠義一圖の朴直漢として、其性格の一致を保てり。然れども其果敢なき最後の讀者を不満ならしむること、猶照子のその如き也。

全曲に於ける統一の缺乏は、其人物の行動をして多く不圓滿不自然に陥らしむ。是れ洵に恨すべきなり。然れども吾等を以て之を見れば、更に他の病源の存するあり。何ぞや。作者が舞臺上の結果を顧慮するの過ぎたること、是なり。

## (七)

戯曲は舞臺上に演すべきものなれば、常に舞臺上の關係に注意し其調和を失はざらむことは、劇詩家の尤も心すべき所なる、素より論無し。然れども其爲に戯曲そのもの、要性を傷くる様の事あらば、具に其事體の輕重に鑑みて其左右を決せざるべからず。世には朗讀戯曲 (Lese-drama) なるものあり。是れ舞臺の繫累を離れたるものにして、近世是種の名作家少からず。之れはた戯曲の一體として是認せらるべきものなり。今夫れ朗讀戯曲として瑕瑾少きものを、強ひて、舞臺に上せむが爲に種々無

理なる改易添削を施すが如きとあらば、是れ一舉兩損と云ふべからむ。

吾等は『牧の方』が是の如き不利益なる舞臺的調攝に富めるを惜む。

## (八)

吾等は春のや主人の技能を推重するに於て、敢て人後に落つるもの非ず。然れども吾等は遂に是『牧の方』を賞賛する所以を知らざるなり。一段一齣をとりて之を讀むときは、文に抑揚あり、場に變化あり、人を見て卒讀を覺えざらしむと雖も、全體の上より一個の戯曲として之を見るときは、遂に散漫の譏を免れ難かるべし。戯曲的形式に缺如せるは、實に其根本的缺點として吾等の切に作者の反省を乞はむと欲するところなり。

是篇を以て『桐一葉』に優れりとするは一般の世評なるが如しと雖も、吾等は決して爾か思惟すること能はず。却て後者を以て遙に前者に優れ